

〔資料〕

妙高山靈光寺所蔵『妙極堂遺稿』翻刻と解題（4）

寺津 麻理絵・関口 静雄

〔解題4〕『妙極堂遺稿』収録の文（銘・縁起・表白等）について

覚彦浄厳は生前から弘法大師空海の再来と風評された。空海の遺稿は門弟真済によって十巻に集成され、『性霊集』の名で伝えられるが、浄厳の遺稿もまた門弟慧曦によって七巻七冊にまとめられ、『妙極堂遺稿』として今日に伝えられている。慧曦が師の遺稿を編集するに当たって『性霊集』をつよく意識していたことは『妙極堂遺稿』第一冊目巻頭の「叙」から容易に推量されるが、上田靈城師は「浄厳の詩文が門弟によって編集されたことは、大師再来の信仰が靈雲門下に根づきつつあったことを示している」（『浄厳和尚伝記史料集』昭和五四年八月名著出版、三五頁）といわれる。

浄厳はその生涯に膨大な著作を遺したが、『妙極堂遺稿』七巻七冊には浄厳の生前また没後にも公刊されなかった詩文が多数収録されている。少年時代から生涯にわたって愛好した漢詩や聯句には時事的要素が多く詠み込まれていて、単に文芸的な意味での漢詩や聯句に止まっていけないのが特徴で、とくに旅中の漢詩は寺社仏閣への参詣を怠らなかつた浄厳の巡礼記とも見ることができ、また書翰はその折々の人的交流の軌跡を示しているから、高弟蓮体の『浄厳大和尚行状記』をはじめ諸伝記類に記された事項の確認や間隙を埋めることができ、なにより浄厳自筆の草稿をもって書写編集されたものであることが重い価値を有している。上田師はこれら遺稿を分類整理されて、漢詩一一五二首・聯句三首・書翰十二通・文（銘・縁起・表白等）一〇一篇と数えられている。

上田師が「文」（銘・縁起・表白等）とされたものには、賛（画賛・像賛）

や勸進状・募縁疏・寺記、また著作の序・跋、諷誦文なども含むと考えたい。ことに画賛・像賛などの「賛」は梵讚・漢讚・和讚と類を同じくし、本来法会に用いられるものであるから、四句一章の形態は漢詩と同じであるが、その機能と意義はまったく異なる。なお、たとえば『遺稿』巻二・承応二年条に収められた「代清水村喜兵衛作為愛子第七年忌追福詩^{并序}」は清水村喜兵衛の求めに応じて、その愛子道正禪定門七回忌追悼のために十五歳の少年空経（浄厳）が作詩したものであり、また翌承応三年条に載る「悼三五郎少年呈金剛院主書^{并詩}」は金剛院主の甥三五郎少年の死を悔む書状と詩であるが、それらは単に追悼詩というよりも、法会においてその死を悼んで生前の功德を盡に述べる「しのびごと」すなわち「誄」と称すべきものになりえている。空海を敬慕し、みずから空経と称した少年のその思考の深さと文才に驚く。

ここに、『妙極堂遺稿』七巻七冊に収録された鐘銘・縁起・表白・勸進状・募縁疏・寺記・画賛・像賛など、いわゆる「文」を抄出して一覧したい。『妙極堂遺稿』は作品が成立年時順に編集されてもおり、「文」抄出の一覧は浄厳一生涯の行業の大概を把握する助力となりえよう。しかし浄厳の著作は膨大である。公刊された著作をはじめ、蓮体の『浄厳大和尚行状記』などの諸伝記類をも「文」抄出の対象とすべきであるが、それは後日の宿題としたい。

冒頭に番号を付し、成立年時（西暦・年齢）・表題（本文は省略。『妙極堂遺稿』の巻数・収録年条）を示した。

『妙極堂遺稿』収録の文（銘・縁起・表白等）一覧

に詩一篇を付す。

001 承応二年（一六五三・十五歳）六月六日。高野山真別処の興律派祖賢俊良

「金剛山記」（卷一）
（明暦三年条）

永の七回忌に当たり、勸化を受けた河内磯長の道俗村民が挙って報恩のために宝篋印塔を建つ。空経（浄厳）その銘文並に序を草す。

「宝篋印塔銘并序」（卷一）
（承応二年条）

002 承応三年（一六五四・十六歳）是歳。河内錦部郡統松屋（河内長野市天見

「再宮小堂安置阿弥陀尊像寄附観心寺状」（卷一）
（万治二年条）

の橋は徳川二代將軍秀忠が天王寺建立の余材をもって再興したものが、寛永十年（一六三三）の水害に遭った。これを修築して高野山參詣の人馬の難を救わんため、勸進状を草して諸人に一紙半銭の喜捨を請う。

009 万治二年（一六五九・二十一歳）四月八日。河内観心寺に寓居する沙門宏玄に代わって不動尊像修補勸進状を草す。

「特請_下蒙_上十方檀越之助縁_二再興河州錦部郡統松屋之橋_一状」（卷一）
（承応三年条）

「請特沐十方緇白勦力修補不動明王尊像状」（卷一）
（万治二年条）

003 承応四年（一六五五・十七歳）是歳。肥前平戸の僧大泉が錦部郡市村の弘法大師ゆかりの妙法寺跡に草庵を建てて仲哀天皇の霊と村莊の鎮護を祈る希望あるを知り、代わって勸進状を草す。

010 万治三年（一六六〇・二十二歳）是歳。元和元年（一六一五）の兵燹で焼失した河内丹南郡徳蓮寺本堂再興のための勸進状を、再建に奔走する沙門覚英に代って草す。

「法師大泉欲_レ落_二成草庵_一之勸進状」（卷一）
（承応四年条）

「請特蒙十方貴賤之助力再興河内州丹南郡野中山徳蓮寺本堂勸進状」（卷一）
（万治二年条）

004 明暦二年（一六五六・十八歳）是歳。和州風森神宮寺で同寺再興を祈って

011 寛文四年（一六六四・二十六歳）三月。相州藤沢観正院略記を創建者松下八太夫源正直の求めに応じて即席に草す。

一日六座の光明真言土砂加持法要を執行し、その諷誦文及び表白を草す。「於和州葛上郡佐備村風森神宮寺執行土砂加持之過去帳」「同表白」

012 寛文四年（一六六四・二十六歳）八月八日。法主快宣のために、土砂加持諷誦文を即席に草す。

005 明暦二年（一六五六・十八歳）是歳。葛城金剛寺三宝院で行われる灌頂法

「為土砂加持諷誦文 即時馳筆」（卷四）
（寛文四年条）

会の誦経文を草す。

013 寛文四年（一六六四・二十六歳）是歳。某のために、代わってその亡父追薦諷誦文を即時に草す。

「三宝山灌頂誦経」（卷二）
（明暦二年条）

「為某_レ父設追薦諷誦文 即時代作」（卷四）
（寛文四年条）

006 明暦三年（一六五七・十九歳）是歳。越前栖原里の中村長兵衛の再三の懇憑によって聖徳太子・明恵高弁上人ゆかりの越前一乗谷瀧谷寺の縁起を草す。

014 寛文四年（一六六四・二十六歳）是歳。河内河合寺縁起を草す。

「一乗谷瀧谷寺縁記」（卷一）
（明暦三年条）

「内州錦県河合寺縁起」（卷四）
（寛文四年条）

007 明暦三年（一六五七・十九歳）是歳。河内金剛山の縁起梗概を草し、巻尾

015 寛文四年（一六六四・二十六歳）是歳。縁起無きを憤り、越前高台山楞嚴

寺記を草し、後世の同志に貽さんとす。

「高台山楞嚴寺記」(卷四 寛文四年条)

016 寛文五年(二六六五・二七七歳) 八月七日。高野山蓮上院二十一世権大僧都寛秀に代わって法楽寺を妙音寺とするべき牒を草す。

「法楽寺為妙音寺之牒」(卷四 寛文五年条)

017 寛文五年(二六六五・二七七歳) 是冬。友人空性の求めに応じ、明春天野宮に於ける論議の草稿を代作す。

「明年孟春之初、天野宮ニ有ニ毎歳例規之五問一答之論議一。其丁ニ堅義ニ之人者、予所ニ素ヨリ相知ル之空性子也。其ノ第一ノ答ハ謂ク遍計所執、其ノ第二ノ答ハ謂ク三自大乘。此之ニ條ノ一重囑シテ予ニ書レシム之ヲ。竟レ日達レ夕ニ引テ及ニ曉天。稍ク畢レテ事ヲ矣、因テ述ニ一偈ニ示ス之ニ」(卷四 寛文五年条)

018 寛文七年(二六六七・二八九歳) 六月二十一日。金剛峰寺南院主良意に代わって南院修覆記を草す。

「南院修覆記」(卷四 寛文七年条)

019 寛文七年(二六六七・二八九歳) 是秋。明国の凌迪知撰『文選錦字録』二十一巻を校訂施注した『増統注文選錦字』の序を撰す。

「文選錦字録自序」(卷四 寛文五年条)

020 寛文九年(二六六九・三十一歳) 三月上旬。但州竹野の荊木山縁起を草す。

「但州美含郡竹野郷荊木山縁起」(卷五 寛文九年条)

021 寛文九年(二六六九・三十一歳) 是歳。汎用に過去帳序を撰す。

「過去帳序」(卷五 寛文九年条)

022 寛文九年(二六六九・三十一歳) 是歳。天野奥沢灯籠銘を撰す。

「天野奥沢灯籠銘」(卷五 寛文九年条)

023 寛文十年(二六七〇・三十二歳) 六月二十七日。南山寓住の沙門澹然に代わって、備中の祇園寺縁起を草す。

「補陀洛山祇園寺縁起」(卷五 寛文十年条)

024 寛文十年(二六七〇・三十二歳) 是秋。千手院住持有昌の請により遠州青林山頭陀寺の鐘銘を撰す。

「頭陀寺鐘銘并序」(卷五 寛文十年条)

025 寛文十一年(二六七一・三十三歳) 是歳。大坂興徳寺千手堂募縁疏を草す。

「撰之大坂興徳寺千手堂募縁疏」(卷五 寛文十一年条)

026 寛文十一年(二六七一・三十三歳) 是歳。河内円通寺鑄鐘募縁疏を草す。

「請下ニ内州石川郡本不見山円通寺ニ鑄ニ一鉅鐘ニ警ニ悟長眠ノ群類ニ免中脱無明ノ大夜上募縁ノ疏」(卷五 寛文十一年条)

027 寛文十一年(二六七一・三十三歳) 是歳。和州慈眼寺之記を草す。

「和州葛上郡千光山慈眼寺之記」(卷五 寛文十一年条)

028 寛文十二年(二六七二・三十四歳) 九月。仏蘭之記を草して菩提山寺に奉納す。

「仏蘭之記」(卷五 寛文十二年条)

029 寛文十二年(二六七二・三十四歳) 是歳。汎用に過去靈簿題辭を撰す。

「過去靈簿題辭」(卷五 寛文十二年条)

030 寛文十二年(二六七二・三十四歳) 是歳。大鳥山神鳳寺の真政円忍律師の行状記を草す。

「円忍律師行状」(卷五 寛文十二年条)

031 寛文十二年(二六七二・三十四歳) 是歳。汎用に誦経表白を撰す。

「誦経表白」(卷五 寛文十二年条)

032 寛文十二年(二六七二・三十四歳) 是歳。吉野山金剛蔵王講の表白を草す。

「吉野山金剛蔵王講表白」(卷五 寛文十二年条)

033 寛文十三年(二六七三・三十五歳) 正月。募縁疏を草して鬼住村民に大般若経の利益を説き、洛陽の書肆から購入した同経を同村常楽寺に奉納せしむ。

「大般若経募縁疏」(卷六 寛文十三年条)

034 寛文十三年（一六七三・三十五歳）二月十七日。某三十三度行者の供養のために曼荼羅供表白並に諷誦文を草す。

「三十三処巡礼三十三度供養漫荼羅供表白」「同諷誦文」（卷六 寛文十三年条）
035 寛文十三年（一六七三・三十五歳）是歳。米田八郎左衛門の需めに応じて八幡大神影に贊を付す。

「八幡大神影ノ贊 応米田八郎左衛門需」（卷六 寛文十三年条）
036 寛文十三年（一六七三・三十五歳）是歳。菅原道真の御影に贊を付す。
「菅神ノ像ノ贊」（卷六 寛文十三年条）

037 寛文十三年（一六七三・三十五歳）是歳。京都牛尾山法嚴寺実録および同寺興建幹縁疏を草す。

「牛尾山法嚴寺実録」「同寺興建幹縁疏」（卷六 寛文十三年条）
038 寛文十三年（一六七三・三十五歳）是歳。阿州勝浦郡靈鷲山鶴林寺の縁起を草す。

「阿州勝浦郡靈鷲山ノ記」（卷六 寛文十三年条）
039 寛文十三年（一六七三・三十五歳）是歳。阿州勝浦郡靈鷲山鶴林寺の地蔵菩薩の靈験を記す。
「聖尊感応」（卷六 寛文十三年条）

040 延宝元年（一六七三・三十五歳）是歳。播州法花山吉祥寺記を草す。

「播之美葱郡吉川谷吉祥寺記」（卷六 延宝元年条）
041 延宝三年（一六七五・三十七歳）是歳。以前草した大鳥山神鳳寺の真政円忍律師の行状記に贊を付す。

「円忍律師ノ行状并贊 行状載于別卷」（卷六 延宝三年条）
042 延宝三年（一六七五・三十七歳）是歳。自著『菩薩戒診註』の自叙を撰す。
「菩薩戒診註自叙」（卷六 延宝三年条）

043 延宝四年（一六七六・三十八歳）九月十六日。河内石川郡龍泉寺の銅鐘銘を撰す。

「龍泉寺銅鐘銘」（卷六 延宝四年条）
044 延宝四年（一六七六・三十八歳）是歳。越中千光寺の銅鐘銘を撰す。

「越中芹谷山千光寺銅鐘銘」（卷六 延宝四年条）
045 延宝五年（一六七七・三十九歳）十二月二十三日。讃州塩飽の極楽密寺主有誉阿闍梨の求めによって銅鐘銘を撰す。

「讃州牛頭山極楽密寺長徳院銅鐘銘」（仮題）（卷六 延宝五年条）
046 延宝六年（一六七八・四十歳）正月。和州宇知郡宇野郷の青龍寺の銅鐘銘を撰す。

「和州青龍寺銅鐘銘」（卷六 延宝六年条）
047 延宝六年（一六七八・四十歳）三月二十六日。讃州善通寺誕生院主有謙の招きによって讃州に赴く途中、撰津住吉地蔵院で遍照院修造幹縁疏を草す。

「備中西阿地遍照院修造幹縁疏 戊午三月廿六日 於住吉地蔵院作」（卷六 延宝六年条）
048 延宝六年（一六七八・四十歳）三月二十八日。また讃州への旅中、大坂の旅館で泉州大鳥郡和田谷の補陀洛山放光寺記を草す。

「泉州補陀洛山ノ記 豎百五十歩横百八十余歩 三月二十八日於大坂旅館作」（卷六 延宝六年条）
049 延宝六年（一六七八・四十歳）七月六日。この年四月二十一日より善通寺に於て法華経を講じ始め九月九日に終わる。この間雨請いをして靈験あり。また講談の暇に蓮体を伴って弘法大師の旧跡を廻り、高祖大師影に贊を付す。

「高祖大師ノ影贊 七月六日於讃州善通寺作 与櫛無村庄野権十郎」（卷六 延宝六年条）
050 延宝六年（一六七八・四十歳）十月二十一日。讃州那珂郡塩飽広島立石浦の宝珠山神光寺阿弥陀院の銅鐘銘を撰す。

「讃州神光寺銅鐘銘」（卷六 延宝六年条）
051 延宝六年（一六七八・四十歳）是冬。讃州屋島の蘭若に寓居の折り、弟子入り望む一信士に一宝道生の法号を与えた経緯を記す。

「一宝道生號」(卷六 延宝六年条)

052 延宝六年(二六七八・四十歳) 是歳。播州多可郡松井莊の掃見山金藏寺記を草す。

「播陽金藏寺ノ記」(卷六 延宝六年条)

053 延宝六年(二六七八・四十歳) 是歳。肥前佐嘉郡賀世莊の宝樹山円城寺の尊祐法印の影贊を草す。

「肥之前州宝樹山円城寺尊祐法印ノ影贊」(卷六 延宝六年条)

054 延宝八年(二六八〇・四十二歳) 是歳。予州宇摩郡の三角寺に金光寺僧道正が鑄造した鉦鐘の銘文を撰す。

「予州三角寺銅鐘銘」(卷六 延宝八年条)

055 延宝八年(二六八〇・四十二歳) 是歳。弘法大師の画像に贊を付す。

「弘法大師画像贊」(卷六 延宝八年条)

056 天和元年(二六八一・四十三歳) 六月。讃州多度郡曼茶羅寺の現住宥盛阿遮梨の求めに応じて寺記一卷を草す。

「讃州多度郡漫茶羅寺記」(卷六 延宝九年条)

057 天和元年(二六八一・四十三歳) 十月。摂州尊鉢里の多羅山若王寺縁起を草す。

「摂州尊鉢里多羅山若王寺縁起」(卷六 延宝九年条)

058 天和元年(二六八一・四十三歳) 是歳。摂州天満郷の大融寺の銅鐘銘を撰す。

「摂州天満郷大融寺銅鐘銘」(卷六 延宝九年条)

059 天和二年(二六八二・四十四歳) 三月二十一日。讃州出釈迦峰虚空蔵堂助縁の緇素名簿に序を撰す。

「讃州出釈迦峯虚空蔵堂助縁緇素名簿序」(卷六 天和二年条)

060 天和二年(二六八二・四十四歳) 十一月二十三日。讃州土器郷の万恒寺有仙の需めに依じて銅鐘銘を撰す。

「讃州鶴足郡万恒寺銅鐘銘并叙」(卷六 天和二年条)

061 天和二年(二六八二・四十四歳) 十二月。播州報恩寺之記を草す。

「播州印南郡平庄報恩寺之記」(卷七 天和二年条)

062 天和二年(二六八二・四十四歳) 是歳。寛文十年(一六七〇) 正月二十一日に遷化した師主朝遍の行状記を草す。

「高野山宝性院第十九世朝遍法印行状」(卷六 天和二年条)

063 天和二年(二六八二・四十四歳) 是歳。『悉曇三密鈔』の叙引を撰す。

「悉曇三密鈔叙引」(卷七 天和二年条)

064 天和二年(二六八二・四十四歳) 是歳。法然上人影に贊を付す。

「法然上人影贊」(卷七 天和二年条)

065 天和二年(二六八二・四十四歳) 是歳。善導大師影に贊を付す。

「善導大師影贊」(卷七 天和二年条)

066 天和三年(二六八三・四十五歳) 四月下旬。長州発光寺の僧澄海大光の勧めによって尾道西国寺に夏安居して経を講じ、寺僧らに菩薩戒・許可を受け安流を伝授す。安居の間に懐義・有英・慧光・真寂・普光らの助筆を得て宥範上人相伝の安流の折紙・口訣類を借覽して書写校合し、宥範撰『大疏妙印鈔』八十巻を書写す。また『別行次第』を撰し、『別行次第秘記』を起筆す。その折り澄海の求めに応じて弘法大師童形像に贊を付す。

「高祖大師童形像贊」(卷七 天和三年条)

067 天和三年(二六八三・四十五歳) 是歳。摂州東生郡小橋興徳寺主憲意の需めに依じて大師影に贊を付す。

「高祖大師講般若心経影贊」(卷七 天和三年条)

「高祖大師講般若心経影贊」(卷七 天和三年条)

068 貞享元年(二六八四・四十六歳) 二月二十一日。実慧大徳興隆の河内観心寺は七星如意輪観音を本尊とする。同寺大衆の需めに依じて弘法大師八百

五十回忌曼荼羅供の表白・誦経表白・諷誦文を草す。

「高祖大師八百五十回忌漫荼羅供表白」 「同漫荼羅供誦経表白同上」 「同諷誦文」 (天和四年条)

069 貞享元年 (二六八四・四十六歳) 三月七日。教興寺に五間四面の祖師堂を

建立して弘法大師と聖徳太子の二尊像を安置し、伝法・受明・結縁の灌頂壇を開き、誦経表白・諷誦文を草して大師八百五十遠忌の行事に当つ。

「伝法灌頂誦経表白」 (高祖大師八百五十回忌教興寺道場) 「同諷誦文」 (貞享元年条)

070 貞享元年 (二六八四・四十六歳) 三月七日頃。河内天野山衆徒のために大師八百五十回忌曼荼羅供の表白を草す。

「漫荼羅供表白」 (天野山衆徒) (貞享元年条)

071 貞享元年 (二六八四・四十六歳) 八月二十一日。弘法大師像に贊を付す。

「弘法大師像ノ贊」 (八月二十一日) (貞享元年条)

072 貞享元年 (二六八四・四十六歳) 是歳。生駒宝山寺湛海の需めに応じ、般若窟之記を草す。

「和州添下郡般若窟之記」 (応宝山湛海師之求也) (貞享元年条)

073 貞享二年 (二六八五・四十七歳) 三月十日。河内観心寺衆徒のために同寺恒例祖師忌辰曼荼羅供の誦経表白を草す。

「観心寺恒例祖師忌辰曼荼羅供誦経表白」 (三月十日) (貞享二年条)

074 貞享二年 (二六八五・四十七歳) 十二月十五日。江戸市谷光徳院落慶法要の理趣三昧表白を草す。

「江戸市谷光徳院観音閣建立供養并安像慶讃理趣三昧表白」 (十二月十五日) (貞享二年条)

075 貞享三年 (二六八六・四十八歳) 閏三月七日。江戸穴八幡放生寺に於て庭儀灌頂を行じ、その表白・返答・諷誦文を草す。

「武州豊島郡高田八幡宮放生寺庭儀灌頂歎徳表白」 (予為阿闍梨放生寺主示洗并本如為受者前住密藏院深説房美清為)

「返答」 「同時諷誦文」 (貞享三年条)

076 貞享四年 (二六八七・四十九歳) 五月二十九日。弘法大師像に贊を付す。

「弘法大師ノ贊」 (五月廿九日) (貞享四年条)

077 貞享四年 (二六八七・四十九歳) 十月八日。弘法大師像に贊を付す。

「又」 (十月八日) (貞享四年条)

078 貞享三年 (二六八六・四十八歳) 是歳。駿府の茗商の場源七の求めによつて日輪大師像に贊を付す。

「日輪大師ノ贊」 (駿府茗商の場源七求馬) (貞享三年条)

079 貞享三年 (二六八六・四十八歳) 是歳。江戸牛込多門院主覚英の求めによつて阿弥陀如来図に贊を付す。

「武府牛罩ノ郷多聞院主覚英去歳冬夢彌陀如来乗ニノ扁舟ニ浮ニ于大洋ニノ如意珠泛ニ于波上ニ覺テ而図レシテ之索ニ贊ヲ于予」 (貞享三年条)

080 元禄元年 (二六八八・五十歳) 正月二十四日。弘法大師像に贊を付す。

「弘法大師贊」 (正月二十四日) (元禄元年条)

081 元禄元年 (二六八八・五十歳) 三月七日。備後尾道の西国寺に於て寺主密照のために伝法灌頂と結縁灌頂を修し、その表白・諷誦文を草す。

「伝法灌頂後朝嘆徳ノ表白」 (戊辰春備後尾道浦西国寺主密照灌頂之時予為大阿闍梨妙嚴勤シ之) 「同時諷誦文」 (三月七日) (元禄元年条)

082 元禄元年 (二六八八・五十歳) 五月十六日。心誉清円善女の書写せし阿弥陀經一千卷の終わりに贊す。

「書下心誉清円善女人写阿弥陀經一千卷之終」 (五月十六日) (元禄元年条)

083 元禄元年 (二六八八・五十歳) 六月五日。泉州小寺の住持存有書写大般若經の跋文を撰す。

「泉州大鳥郡池田谷方町村小寺ノ住持阿闍梨存有書写大般若經」 (同村、父老伏屋長左衛尉重賢傾財供紙筆料予跋ニ其尾) (六月) (元禄元年条)

084 元禄元年 (二六八八・五十歳) 十一月。『梵網經撮要』の序文を撰す。

「書梵網經撮要之首」 (元禄元年条)

085 元禄二年（二六八九・五十一歳）五月二日。弟子法徹、浄徹の肖像を画いて題辞を求む。これに題賛を付す。

「法徹閣黎摸^{ニシテ}予^カ肖像^ヲ以求^{レム}題^{セシ}コトヲ上^ニ二^二月^二日^二」（卷七 元禄二年条）

086 元禄二年（二六八九・五十一歳）七月。請われて慧門撰『瑞芳共著標科会記羯磨疏』に小引序を撰し贈る。

「題^ニスル標科会記羯磨^ノ疏^ニ小引^ニ」（卷七 元禄二年条）

087 元禄二年（二六八九・五十一歳）是歳。秘鍵大師像に賛を付す。

「大師像賛^{世号秘鍵大師}」（卷七 元禄二年条）

088 元禄三年（二六九〇・五十二歳）初夏。宍戸氏所持の観音像に賛を付す。

「宍戸氏観音^ノ像^ノ賛^{初夏黒七}」（卷七 元禄三年条）

089 元禄四年（二六九一・五十三歳）十月三日。柳沢保明の推挙によって幕府より江戸湯島に寺地三千五百坪と金三百両を下賜され、幕府永代の祈願所たる宝林山靈雲寺を創建す。閏八月二日着工し十月半ばに完成。牧野備後守の喜捨を得て銅鐘を鑄造し、その銘文を撰す。

「武州豊島^ノ郡湯島^ノ郷宝林山靈雲寺銅鐘銘^{元禄四年条}」（卷七 元禄四年条）

090 元禄五年（二六九二・五十四歳）七月二十日。紹観閣黎の需めに応じ、弘法大師御影に賛を付す。

「高祖大師^ノ御影^ノ賛^{七月廿日}」（卷七 元禄五年条）

091 元禄五年（二六九二・五十四歳）九月二日。長江瑞庵所持の黒竹に賛を付す。

「長江氏瑞庵^カ黒竹^ノ賛^{九月二日}」（卷七 元禄五年条）

092 元禄七年（二六九四・五十六歳）四月十八日。光明無礙観を修した後、大島氏に指導の言を与える。

「書^ニ光明無礙観後^{三示}大島氏^ニ」（卷七 元禄七年条）

093 元禄七年（二六九四・五十六歳）五月六日。十一面観音御影に賛を付し、これを村上氏に与える。

「贊^ニ十一面像^ヲ与^ニ村上氏^ニ」（卷七 元禄七年条）

094 元禄七年（二六九四・五十六歳）閏五月。大和法隆寺堂塔修補のため募縁の疏を法隆寺大衆に代わって草す。

「大和州法隆寺問寺殿塔修補募縁疏^{元禄七年条}」（卷七 元禄七年条）

095 元禄七年（二六九四・五十六歳）十月十三日。大和法隆寺宝蔵の貝多羅心經・梵文仏頂尊勝陀羅尼・悉曇十四音を書写し、その意義を記す。

「書^ニ騰^ニ貝多^ノ心經^ノ尊勝陀羅尼^ノ悉曇十四音^ノ之後^上」（卷七 元禄七年条）

096 元禄八年（二六九五・五十七歳）十二月十七日。『虚空蔵秘訣』書写し、その意義を記す。

「書^ニ虚空蔵秘訣^ノ後^上」（卷七 元禄八年条）

097 元禄九年（二六九六・五十八歳）三月十三日。河内観心寺大衆、実慧大徳八百五十回忌大曼荼羅供を修す。仁和寺真乘院孝源導師を勤め、浄厳に命じて曼荼羅供表白を草せしむ。

「河州観心寺実慧僧正八百五十回忌漫荼羅供表白^{仁和寺真乘院前法務大僧正孝源為其導師命^ニ予^ニ製^シ之}」（卷七 元禄九年条）

098 元禄九年（二六九六・五十八歳）八月十五日。相州高森八幡宮の銅鐘銘を撰す。

「相州大住郡高森里八幡宮^ノ銅鐘銘^{八月十一日}」（卷七 元禄九年条）

099 元禄十年（二六九七・五十九歳）六月二十八日。武都の新山不著居士が手写的法華経を靈雲寺に持参して供養を乞う。よって八日仏成道日に設斎供養す。その経緯を記し、賛偈を付す。

「書^ニ新山不著居士手写^ノ法華経^ノ之後^上」（卷七 元禄十年条）

100 元禄十年（二六九七・五十九歳）八月三十日。河南高安郡教興寺を河州錦部郡清水里地藏寺住持妙嚴近円（惟宝蓮体）に悉く付嘱する状を草す。

「河州教興寺付嘱^ノ状^{元禄十年条}」（卷七 元禄十年条）

101 元禄十年（二六九七・五十九歳）十二月七日。『冠註即身成仏義』を摺筆

し、その頌を三首草す。

「冠註即身成仏義絶筆頌三首 十二月七日」(卷七 元禄十年条)

102 元禄十一年(一六九八・六十歳)二月二十五日。鎌倉在柄天神社上遷宮の祭文を草す。

「鎌倉在柄天神社上遷宮祭文」(卷七 元禄十一年条)

103 元禄十一年(一六九八・六十歳)七月四日。坪井氏の請に応じ、龍猛大士御影に賛偈を付す。

「龍猛大士賛偈応于坪井氏請」七月四日(卷七 元禄十一年条)

104 元禄十一年(一六九八・六十歳)是歳。朽木植元公の求めに応じ、弘法大師御影に賛を付す。

「弘法大師御影賛 応朽木氏植元公之求」(卷七 元禄十一年条)

105 元禄十二年(一六九九・六十一歳)八月二十一日。若狭羽賀寺主再実の求めに応じ、寺宝の賛頌を草し贈る。

「今月初三若州羽賀寺主再実大徳見^レ来^リ訪^ハ、敝廬^ニ之^ヲ次^テ覽^ル彼^ノ寺^ノ実録及^ヒ勅書教策數十通^ヲ其^ノ実録^ハ也則陽光院之宸筆虎踞^マ龍臥^ス心魂飛揚^シ至^レ不^レ自^レ勝^ハ粵^ニ実公責^ニ貧道^ニ生筆^ニ其^ノ事^ヲ貧道生来不^レ知^ニ文翰^一固辞^ス不^レ允^ハ彊^為頌^曰八月二十一日」(卷七 元禄十二年条)

106 元禄十二年(一六九九・六十一歳)十月。武州豊島郡練馬村金乗院万徳寺主慧辯大徳の求めに応じ、鉦鐘銘を撰す。

「武州豊島郡練馬村金乗院鉦鐘銘 彼寺第十一内田四郎兵衛施鐘」(卷七 元禄十二年条)

107 元禄十二年(一六九九・六十一歳)是歳。米倉丹後守昌明、相州に徳石山道明寺を創建して靈雲寺末となし銅鐘銘を求む。よって撰す。

「相州大住郡田原邨徳石山道明寺銅鐘銘 序并

米倉丹後守源昌忠法号徳石道明其家嫡昌明為^レ報^ニ父恩^一於^ニ其弟昌仲之采地田原村^ニ創建^ニ紺字^ヲ山名^ニ徳石寺号^ニ道明^一蓋永世不^レ使^レ忘^ニ祖^ノ業^一也而属^ニ予寺^ニ而為^ニ末寺^一昌明索^ニ鐘銘^ヲ于^ニ予^ニ故尔」(卷七 元禄十二年条)

業也而属予寺而為末寺昌明索鐘銘于予故尔(卷七 元禄十二年条)

【追記】

画像処理・翻刻文作成等について諸氏の助力を得た。御礼申し上げる。

岩城佑希(大学院生活機構構研究科生活文化研究専攻一年)・岡本夏奈(日本語日本文学科四年)・恩田寛子(歴史文化学科三年)・三枝桃子(同)・佐野梨咲(同)・鈴木香菜(同二年)・高橋花乃(同)・竹村佳奈(初等教育学科二年)

(関口静雄)

【翻刻凡例】

- 1 妙高山靈光寺所蔵『妙極堂遺稿』(写本、全七冊)の第四冊目卷之四を翻刻する。洪茶色紙表紙、袋綴装、縦二七九mm・横一八五mm。
- 2 原則として通行の文字表記を用いて翻刻した。
- 3 行取・清濁・誤字・宛字は底本のままに翻刻し、改丁は「④01オのように示した。
- 4 踊字・繰返符号は二字分までは底本のままとし、それ以上は通行の表記に改めた。
- 5 訂正・後補等の指示があるときはそれに従い、本文中に後補挿入した文字には、「妙」のように傍点を付した。
- 6 韻文には適宜空格を施した。
- 7 判読不能の箇所は□で示した。



└ ④表表紙

妙極堂遺稿卷之四

寬文四甲辰年 行年二十六

内州錦縣河合寺緣起

侍者僧某等編錄

夫惟火不自熾熾必由薪法不自興興定俟人是故
前後二佛之化導内外兩教之隆興猶如四時之錯
行日月之代明也所謂能弘之者吾大師薄伽梵其
人也創業寂滅道場垂統像末法時其於黔首慈仁
恩惠山毫猶先海滴涸底猥賤點慧何思議之承業
而興者月氏也則馬鳴龍樹提婆童受無著天親護

妙極堂遺稿卷之四

寬文四甲辰年 行年二十六

内州錦縣河合寺緣起

侍者僧某等編錄

夫惟火不自熾熾必由薪法不自興興定俟人是故
前後二佛之化導内外兩教之隆興猶如四時之錯
行日月之代明也所謂能弘之者吾大師薄伽梵其
人也創業寂滅道場垂統像末法時其於黔首慈仁
恩惠山毫猶先海滴涸底猥賤點慧何思議之承業
而興者月氏也則馬鳴龍樹提婆童受無著天親護

(白丁)

④表表紙見返

④01才

法戒賢並皆博通而研精于真乘宏瞻以覃思于玄門偉于一時傑然万世者也如彼中華也則南嶽慧思天台智顛包羅刹塵於三觀該攝地墨于一心清涼澄觀圭峯宗密扇水波不離之宗風建金莊不異之法幢慈恩玄奘為唯識之導首終南道宣一毘尼之弘傳法朗吉藏二豪則八不智劍絕諸戲于異途中道心鏡照三世於不生至豐聰王子降靈於吾邦也發語之始稱大雄之號志學之後膺酷虐之党起合也於藥栽肇万里于跂步自余以降慧灌靈雲行基菩提道昭道慈空海最澄鑑真慈訓或群或友踵武

④ 01ウ

而行之者幾何乎哉或遠涉蒼波傳真筌於絕徼或遐遊赤懸礪妙機於碩師如是之人事迹雖異念是感王子之遺風續上宮之餘烈之所致也由是觀之則王子豈夫世雄之木鐸也與克振其文宣敷于國徇羣蠻夷抑為佛子則承繼慈父之業為法將則張皇聖王之命維忠維孝孰能加焉乎哉雖有弘通之師然無輔弼之人則難為遂成輔弼豐聰之鴻業者蘇馬子尤厥選也此寺也者則馬子之胤入鹿臣皇極二年癸卯奉敕所經營之也入鹿取材于林陶瓦于郊鑿石于山芟葦除榛治基陟郢工奏功壯者獻

④ 02オ

法戒賢並皆博通而研精于真乘宏瞻以覃思于玄門一偉乎一時傑然万世者也如彼中華也則南嶽慧思天台智顛包羅刹塵於三觀該攝地墨于一心清涼澄觀圭峯宗密扇水波不離之宗風建金莊不異之法幢慈恩玄奘為唯識之導首終南道宣一毘尼之弘傳法朗吉藏二豪則八不智劍絕諸戲于異途中道心鏡照三世於不生至豐聰王子降靈於吾邦也發語之始稱大雄之號志學之後膺酷虐之党起合抱於藥栽肇万里于跂步自余以降慧灌靈雲行基菩提道昭道慈空海最澄鑑真慈訓或群或友踵武

而行之者幾何乎哉或遠涉蒼波傳真筌於絕徼或遐遊赤懸礪妙機於碩師如是之人事迹雖異念是感王子之遺風續上宮之餘烈之所致也由是觀之則王子豈夫世雄之木鐸也與克振其文宣敷于國徇羣蠻夷抑為佛子則承繼慈父之業為法將則張皇聖王之命維忠維孝孰能加焉乎哉雖有弘通之師然無輔弼之人則難為遂成輔弼豐聰之鴻業者蘇馬子尤厥選也此寺也者則馬子之胤入鹿臣皇極二年癸卯奉敕所經營之也入鹿取材于林陶瓦于郊鑿石于山芟葦除榛治基陟郢工奏功壯者獻

力庶民子來、役夫蟻集、鞠明究曠、不日而成、四阿有
嚴若暈斯飛、丹雘絢爛、眩耀人目、于其正殿、奉千眼
大悲並金剛藏王、蓋平址之日、大悲救世、從地湧出
忿怒尊王、條爾來現之故也、其後、逕二十餘祀、天智
皇帝御宇之日、詔藤、鎌足、就此山阿、創建寶塔、像於
無量壽如來、又走和之、大安、肇致聖德王子、所親刻
之醫王善逝、安正殿之左、復安奉佛舍利、不動忿怒
大日如來、不空羼索、像以倍四眾之所瞻奉、奉別立
僧室八宇、度比丘八人、朝懺暮悔、午夜誦無時、暫
懈、施田若干頃、克之齋粥、後來空海大師、練行經由

力庶民子來、役夫蟻集、鞠明究曠、不日而成、四阿有
嚴若暈斯飛、丹雘絢爛、眩耀人目、于其正殿、奉千眼
大悲並金剛藏王、蓋平址之日、大悲救世、從地湧出
忿怒尊王、條爾來現之故也、其後、逕二十餘祀、天智
皇帝御宇之日、詔藤、鎌足、就此山阿、創建寶塔、像於
無量壽如來、又走和之、大安、肇致聖德王子、所親刻
之醫王善逝、安正殿之左、復安奉佛舍利、不動忿怒
大日如來、不空羼索、像以倍四眾之所瞻奉、奉別立
僧室八宇、度比丘八人、朝懺暮悔、午夜誦無時、暫
懈、施田若干頃、克之齋粥、後來空海大師、練行經由、

之次相、斯靈嶺、請丹生高野二神、及以白山八幡吉
野神等作鎮、于良自余世、裨補數回、殿閣門廊次
第而就、至南朝、二帝竭信、傾財屢賜膏腴、所謂泉之
國府、今市攝之溝、枕守里三之大内等、詔旨無慮一
百三十餘、而今見在者、纔餘十之一、二、寬成天皇弘
和二年壬戌、至于永世、置權少僧都、權律師、法眼以
為統綱、天正之際、戎馬紛紜、名藍望刹、多為煨燼、之
區、而狐兔之迹、交道此刹、並羅斯殃、所藏之舍利、又
為根來兇徒、之被劫奪、香燈無繼、瓴甃殆盡、矣、豐臣
氏秀賴公、聞而嘆之、乃命匠人、幻成殿堂、黎庶悅服、

之次相、斯靈嶺、請丹生高野二神、及以白山八幡吉
野神等作鎮、于良自余世、裨補數回、殿閣門廊次
第而就、至南朝、二帝竭信、傾財屢賜膏腴、所謂泉之
國府、今市攝之溝、枕守里三之大内等、詔旨無慮一
百三十餘、而今見在者、纔餘十之一、二、寬成天皇弘
和二年壬戌、至于永世、置權少僧都、權律師、法眼以
為統綱、天正之際、戎馬紛紜、名藍望刹、多為煨燼、之
區、而狐兔之迹、交道此刹、並羅斯殃、所藏之舍利、又
為根來兇徒、之被劫奪、香燈無繼、瓴甃殆盡、矣、豐臣
氏秀賴公、聞而嘆之、乃命匠人、幻成殿堂、黎庶悅服、

欣其復古逝川無駐風葉易零真節苦心年竄月七
鳥啼鹿棲外荒露深非弘而隆之大而成之之人而
復闕輔而增脩之檀主寤寐思服何益之有唯恐名
區勝境莫託莫傳若夫無傳後世之人依何興絕繼
廢之者有耶於是乎書

年月日

相州藤澤鄉海見山草海寺觀正院略記
相州藤澤鄉海見山草海寺觀正院則是松下八太
夫源正直之所創建也正直嘗持念金銅正觀世音
像乃往聖之所鑄就而靈應異瑞正得而稱者心然

與別當草海法師同心合志為求現當勝利經始堂
宇造殿閣雇妙工而別刻植像一軀以彼銅像藏此
身中又新彫護世四天王像各一軀安置寶宮以為
本尊也伏願依聖尊加持力大天威德力臨命終時
莫諸障難必蒙引攝往生淨刹且刻石塔婆一基建
于堂前為知後昆書之于牌以記寬文第四歲舍甲
辰三月穀旦松下氏源正直謹書

為土沙加持諷誦文 昂時 駝筆

觀夫那伽曷樹繹幽南印以排微言之玄闕遍照金
剛扇祕東嶠而誘大度之來學遙源泝而不究濬波

欣其復古逝川無駐風葉易零真節苦心年竄月七
鳥啼鹿棲外荒露深非弘而隆之大而成之之人而
復闕輔而增脩之檀主寤寐思服何益之有唯恐名
區勝境莫託莫傳若夫無傳後世之人依何興絕繼
廢之者有耶於是乎書

年月日

相州藤澤鄉海見山草海寺觀正院略記
相州藤澤鄉海見山草海寺觀正院則是松下八太
夫源正直之所創建也正直嘗持念金銅正觀世音
像乃往聖之所鑄就而靈應異瑞正得而稱者心然

與別當草海法師同心合志為求現當勝利經始堂
宇造殿閣雇妙工而別刻植像一軀以彼銅像藏此
身中又新彫護世四天王像各一軀安置寶宮以為
本尊也伏願依聖尊加持力大天威德力臨命終時
莫諸障難必蒙引攝往生淨刹且刻石塔婆一基建
于堂前為知後昆書之于牌以記寬文第四歲舍甲
辰三月穀旦松下氏源正直謹書

為土沙加持諷誦文 昂時 駝筆

觀夫那伽曷樹繹幽南印以排微言之玄闕遍照金
剛扇祕東嶠而誘大度之來學遙源泝而不究濬波

游而巨涉余降金地結轍于朝珠林肩隨于野其由
而來寔尚乎哉日若此邃宇者智刃之所遊化宝印
之攸降託也矣動密雲於岩岫經行之屬咸被蔭涼
澍法雨于林樾禪誦之儔僉得潤澤有沙門賴雄者
堅節求真絕粒搜道是乃俯慨椽椽毀纂造梁棟構
嗚呼逝川無待藏舟易失已雖功績之宏復奈廢墜
之何繇稱裝十方之篤信藉万人之資助新屋覺之
修飾告經宮之成畢於是耀加持土沙之慧日以照
迷倒贖濟度衆生之慈航而到寂滅然則法燈久輝
密乘長運仰請十方佛陀成滿悉地乃至法界平等

游而巨涉余降金地結轍于朝珠林肩隨于野其由
而來寔尚乎哉日若此邃宇者智刃之所遊化宝印
之攸降託也矣動密雲於岩岫經行之屬咸被蔭涼
澍法雨于林樾禪誦之儔僉得潤澤有沙門賴雄者
堅節求真絕粒搜道是乃俯慨椽椽毀纂造梁棟構
嗚呼逝川無待藏舟易失已雖功績之宏復奈廢墜
之何繇稱裝十方之篤信藉万人之資助新屋覺之
修飾告經宮之成畢於是耀加持土沙之慧日以照
迷倒贖濟度衆生之慈航而到寂滅然則法燈久輝
密乘長運仰請十方佛陀成滿悉地乃至法界平等

利益寬文四年八月八日護持法主快宣敬白

為某亡父設追薦諷誦文 即時代作

夫春園之桃李使詩人怨五更之風秋林之楓葉教
幽禽失一朝之棲無智卉木猶已遷移如此而況有
心人類轉變何論乎逝水無駐隙駟區追是故秦皇
漢武誰亦見面商湯周文唯聞其名嗚呼哀哉我父
兮恩極昊天情胡不恤命不少延徒費陟岵之望空
興風樹之歎稟性朴直能信朋友勤行劬勞世稱善
士群國之望鄉縣之尤獨員其任噫痛哉沈痾逼體
宿恙切身祈療無効遂殞其命噫嘻悲乎芝蘭萎昨

利益寬文四年八月八日護持法主快宣敬白

為某亡父設追薦諷誦文 即時代作

夫春園之桃李使詩人怨五更之風秋林之楓葉教
幽禽失一朝之棲無智卉木猶已遷移如此而況有
心人類轉變何論乎逝水無駐隙駟區追是故秦皇
漢武誰亦見面商湯周文唯聞其名嗚呼哀哉我父
兮恩極昊天情胡不恤命不少延徒費陟岵之望空
興風樹之歎稟性朴直能信朋友勤行劬勞世稱善
士群國之望鄉縣之尤獨員其任噫痛哉沈痾逼體
宿恙切身祈療無効遂殞其命噫嘻悲乎芝蘭萎昨

夜之霜瓊瑤碎今晨之雷惘惘無措輾轉反側依依
即今奉請三世佛陀十方賢聖獻一裹少物以表微
心誠惘伏願先亡榮魂頓出三有苦輪海忽昇四身
樂受臺乃至鱗蹄角牙同飽銜乳之珍味喘動飛走
齊遊阿字之寶閣

高臺山楞嚴寺記

粵有奇峯雲幙翻風靈仙如在霧帳罩月神人似存
于時有泰澄法師姓三神氏越之前州麻生津人父
安角母伊野氏夢白玉入懷白鳳十一年六月十一
日生時白雪降落庭宇皚々產屋之上積寸餘及五

六歲不交兒輩不遊蘭闈百戲喧巷衢未嘗出見唯
以泥土作佛像以草木構堂宇或采花水合掌供獻
持統六年道昭師遊化此地適投三神氏忽見小童
頭現圓光覆以宝蓋昭獨見餘不能見昭警告父母
曰此兒神童也加敬育焉時澄十一歲十四時變身
坐蓮臺傍有沙門詰曰汝知否我是汝本師也住在
西方汝所坐蓮者觀自在所持之華也汝可以比丘
形施十一面利生普照之德覺而怪喜慎不語人其
歲冬見兒夜々失之怪語兄安方曰季兒每夜潛出
汝趣所止安方承教竊伺出時匿身踵跡到越知峰

夜之霜瓊瑤碎今晨之雷惘惘無措輾轉反側依依
即今奉請三世佛陀十方賢聖獻一裹少物以表微
心誠惘伏願先亡榮魂頓出三有苦輪海忽昇四身
樂受臺乃至鱗蹄角牙同飽銜乳之珍味喘動飛走
齊遊阿字之寶閣

高臺山楞嚴寺記

粵有奇峯雲幙翻風靈仙如在霧帳罩月神人似存
于時有泰澄法師姓三神氏越之前州麻生津人父
安角母伊野氏夢白玉入懷白鳳十一年六月十一
日生時白雪降落庭宇皚々產屋之上積寸餘及五

六歲不交兒輩不遊蘭闈百戲喧巷衢未嘗出見唯
以泥土作佛像以草木構堂宇或采花水合掌供獻
持統六年道昭師遊化此地適投三神氏忽見小童
頭現圓光覆以宝蓋昭獨見餘不能見昭警告父母
曰此兒神童也加敬育焉時澄十一歲十四時變身
坐蓮台傍有沙門詰曰汝知否我是汝本師也住在
西方汝所坐蓮者觀自在所持之華也汝可以比丘
形施十一面利生普照之德覺而怪喜慎不語人其
歲冬見兒夜々失之怪語兄安方曰季兒每夜潛出
汝趣所止安方承教竊伺出時匿身踵跡到越知峰

岩洞中弟入内禮拜數百高唱曰南無十一面觀世音神變不思議者言已出洞登峯頂安方不能昇返宿洞中遲明歸家報文未脫履弟兒歸後到越知峯苦修鍊行自雜髮為比丘衣藤皮食松葉修懺積年發得智解自然感悟容乘怪異之事具難茲述養老元年澄師夙興遠眺東北奇雲斐疊勃興一七日夜冥搜覓之起新開池雲中在妙吉祥童真形相間雅威儀肅穆徐々南至此峯於是安置大聖以專利濟準擬五臺山名高臺又有佛乘上人山麓相攸草創精藍名曰楞嚴澄素於白山明神深有妙緣因茲亦

請彼神于此山餉供禮讚然則白山明神妙理大菩薩十一面觀自在之現體別山聖觀自在之變身大己貴弥陀如來之應跡此之二大士則妙理菩薩之左輔右弼也又大御前一乃眷屬妙德降迹十萬金剛童子遍吉垂化五萬八千采女堅牢女天變作也皇乎哉鴻基已還綿歷歲星張皇正教破逐邪理玄蹤絕軌有說不盡矣正應中後伏見院有旨重雕瑤樓再新瓊臺寄與齋田之書一建武中征夷將軍源尊氏公因定鑿上人之告託恭降嚴命繼增華飾此州太守朝倉氏執信此山施財吾寺傳裔葉已九

岩洞中弟入内禮拜數百高唱曰南無十一面觀世音神變不思議者言已出洞登峯頂安方不能昇返宿洞中遲明歸家報文未脫履弟兒歸後到越知峯苦修鍊行自雜髮為比丘衣藤皮食松葉修懺積年發得智解自然感悟密乘怪異之事具難茲述養老元年澄師夙興遠眺東北奇雲斐疊勃興一七日夜冥搜覓之起新開池雲中在妙吉祥童真形相間雅威儀肅穆徐々南至此峯於是安置大聖以專利濟準擬五臺山名高臺又有佛乘上人山麓相攸草創精藍名曰楞嚴澄素於白山明神深有妙緣因茲亦

請彼神于此山餉供禮讚然則白山明神妙理大菩薩十一面觀自在之現體別山聖觀自在之變身大己貴弥陀如來之應跡此之二大士則妙理菩薩之左輔右弼也又大御前一乃眷屬妙德降迹十萬金剛童子遍吉垂化五萬八千采女堅牢女天變作也皇乎哉鴻基已還綿綿歷歲星張皇正教破逐邪理玄蹤絕軌有說不盡矣正應中後伏見院有旨重雕瑤樓再新瓊臺寄與齋田之書一建武中征夷將軍源尊氏公因定鑿上人之告託恭降嚴命繼增華飾此州太守朝倉氏執信此山施財吾寺傳裔葉已九

世矣天正中。右大臣平信長公威武嚴毅討伐不順。四夷八蠻風行艸靡。朝倉氏亦為之讐寇已而堅。堅甲利利兵舉百萬之衆。寔奮席卷雲散原燎罔有子遺。吾寺亦羅餘燹。綸詔院宣奇寶灵物旧所收畜。皆灰塵矣有成就院主頼鎮嘗為朝倉氏之所敬仰。見斯焦土心魂何持。遂乃尋基認礙更構。茆龕重營。草祠風魑魅之境。一獼猴之棲。乃誥本寺高野山請。南院明德智海阿闍黎為成就院之住持。任院主職。退讓。累能事海闍黎自余至今。年移星回造宮不畢。只惜王侯之不遊。又憤勝域之無記。故書其槩。以

世矣天正中ニ右大臣平ノ信長公威武嚴毅シテ討伐ス不順ヲ四夷八蠻風行キ艸靡ク朝倉氏亦為之カ讐寇ニ已レ而堅ニ堅甲ヲ利利兵ヲ舉テ百萬之衆ヲ寔ニ奮ヒ席ヲ卷ク雲散ケケ原ノ燎ヘテ罔有子遺ニ吾寺モ亦羅ル余燹ニ綸詔院宣奇寶灵物旧所ニ收畜アル皆灰塵トナシヌ矣有成就院ノ主頼鎮トモ嘗テ為ニ朝倉氏ノ之所ニ敬仰セ見ス焦土ノ心魂何ヲ持テ遂ニ尋基ヲ認レ礙ヲ更ニ構ヘ茆龕ヲ重營ニ草祠ト同ニ風魑魅ノ之境ニ一ニス獼猴ノノ之棲ニ乃誥ニ本寺高野山ニ請ニ南院ノ明德智海阿闍黎ヲ為ニ成就院ノ之住持ト任ニ院主ノ職ニ退讓シテ累ニ能事ヲ海闍黎ニ自レ余至レ今年移リ星回テ造宮不畢ヘ只惜ニ王侯ノ之不遊又憤ニ勝域ノ之無記故書シテ其槩ヲ以

④07ウ

貽同志云

年月日

寛文五乙巳年 行年二十七

元旦

自離幽澗濶入徼阻三春梅藥不忘舊柳條園此新頭風遭逼迫詩業似沈淪相慶村翁賀万国一堯民又

貽同志云

年月日

寛文五乙巳年 行年二十七

元旦

自離幽澗濶ヲ入レ徼阻ニ三春ニ梅藥不レ忘レ旧ヲ柳條園ニ此ノ新ニ頭風遭ニ逼迫ニ詩業似ニ沈淪スルニ相慶ヲ村翁ノ賀スルニ万国ニ一堯民又

④08オ

一夜韶光滿遐邇、無邊梅柳映晨暝、平生因喜添詩
卷、不奈年々白髮加。

又

消盡牆根白雪堆、易迎青帝駕、風來報君、請勿苦尋
訪、世上年光陌上埃。

元日修瑜伽護摩、

風光時節俱調和、欽仰深中深達磨、神咒纔持、避妖
魅、成身暫念契、瑜伽無方、不遍四漫、但有願必應、三
佛陀、况是塵沙善男子、同歸法界、一遮那。

閑居春日

寂寥晝掩閑、深邃別區寰、閑課硯中塵、詩料窓外山
天然、耽野趣、懶性任疎頑、和煦茅檐暖、幽禽自往還。

又

蕭然物外遊、午夢尚悠々、唯有折錯茗、不須人獻酬。

春日憶辨子

交淡詩中一世豪、南峰雲樹冒天高、想應多在佛堂、
裏、素袖婆娑唱梵號。

正月二日夜疾風暴雨霹靂數作

薄暮冥々、轉砲中、茅檐草屋雨還加、夜來太惡望春、
信、迅霆疾風恐損花。

一夜韶光滿遐邇、無邊梅柳映晨暝、平生因喜添詩
卷、不奈年々白髮ノ加。

又

消盡牆根白雪ノ堆、易迎青帝ノ駕、風來報君、請勿苦尋
訪、世上年光陌上ノ埃。

元日修瑜伽護摩

風光時節俱調和、欽仰深中ノ深達磨、神咒纔持、避妖
魅、成身暫念契、瑜伽無方、不遍四漫、但有願必應、三
佛陀、况是塵沙ノ善男子、同歸法界、一遮那。

閑居春日

寂寥晝掩閑、深邃別區寰、閑課硯中塵、詩料窓外ノ山
天然、耽野趣、懶性任疎頑、和煦茅檐暖、幽禽自往還。

又

蕭然物外ノ遊、午夢尚悠々、唯有折錯茗、不須人ノ獻酬。

春日憶辨子

交淡詩中一世ノ豪、南峰ノ雲樹冒天高、想應多在佛堂、
裏、素袖婆娑ノ唱中梵號。

正月二日夜疾風暴雨霹靂數作

薄暮冥々、轉砲中、茅檐草屋雨還加、夜來太惡望春、
信、迅霆疾風恐損花。

正月三日使星如飛傳事于南山尋訪其由
蓋疇昔之夕三更初刻火于攝州大坂城至
今日已刻火稍銷歇焉於是而書

飛樓傑閣鐵門牆一夜劫燒塵土揚兒輩身毛聞尚
豎士人軀命定應喪無端震霆能驚睡何故天公降
此殃雲際阿房誰是主蠹殘黔首虎邪狼

春寒

而後村行泥未融却將水筋上花叢萱堂多病母相
忤今日寒於昨日風

正月四日為檢火燼實否登宅南最高峯而

賦其所見

村屋之南山磬確相扶躋攀汗如灌陰雲都除天
快清山川万里真掌握我來元為窮遠望檢知層城
在耶亡昨日人語不虛妄處所回認雲茫茫高堂峻
宇多少數而今只餘兩樓櫓因憶忽得大鵬翼扶搖
積風徂且覩閩東海西百万師彈力效慮空取疲誰
知霹靂成焦土長吁擲毫徒傷悲

夜坐

晚立方勞數去鴉坐來村落絕喧嘩中宵寂寞無餘
事閑吹楫拙獨點茶

正月三日使星如飛傳事于南山尋訪其由
蓋疇昔之夕三更初刻火于攝州大坂城至
今日已刻火稍銷歇焉於是而書

飛樓傑閣鐵門牆一夜劫燒塵土揚兒輩身毛聞尚
豎士人軀命定應喪無端震霆能驚睡何故天公降
此殃雲際阿房誰是主蠹殘黔首虎邪狼

春寒

而後村行泥未融却將水筋上花叢萱堂多病母相
忤今日寒於昨日風

正月四日為檢火燼實否登宅南最高峯而

賦其所見

村屋之南山磬確相扶躋攀汗如灌陰雲都除天
快清山川万里真掌握我來元為窮遠望檢知層城
在耶亡昨日人語不虛妄處所回認雲茫茫高堂峻
宇多少數而今只餘兩樓櫓因憶忽得大鵬翼扶搖
積風徂且覩閩東海西百万師彈力效慮空取疲誰
知霹靂成焦土長吁擲毫徒傷悲

夜坐

晚立方勞數去鴉坐來村落絕喧嘩中宵寂寞無餘
事閑吹楫拙獨點茶

晚景

日落山如睡，人歸門自閉。騷將今不在，景趣是應慳。

問鶯

減却重衣，好倚欄。風和日暖，路泥乾。黃鸝何故，于今
顰為怕，山前微雪殘。

問梅

消盡岩岩，平白雪未。看溪釣淺紅，梅驢人日往，問其
意，春在山頭不在隈。

問春

溪上有梅葩未放，窻前無雪簡難擁。殷勤借問是何

故雪先暖陽，梅後寒。

偶成 十三日

今已十三消，日居青春如水，易推移，余來底事不吟
步，只為餘寒花較遲。

山家

嫩柳耳前坡，野溪藍似掬。樵翁尋伐木，幽谷答那何。

又

卜屋對青岑，路穿修竹林。野人猶愛宿，懶衲兀如瘖。
曉枕猿呼覺，春情蝶自深。病身能用力，殘雪水涯凜。

夜歸

晚景

日落山如睡，人歸門自閉。騷將今不在，景趣是應慳。

問鶯

減却重衣，好倚欄。風和日暖，路泥乾。黃鸝何故，于今
顰為怕，山前微雪殘。

問梅

消盡岩巒，平白雪未。看溪釣淺紅，梅驢人日往，問其
意，春在山頭不在隈。

問春

溪上有梅葩未放，窻前無雪簡難擁。殷勤借問是何

故雪先暖陽，梅後寒。

偶成 十三日

今已十三消，日居青春如水，易推移，余來底事不吟
步，只為餘寒花較遲。

山家

嫩柳耳前坡，野溪藍似掬。樵翁尋伐木，幽谷答那何。

又

卜屋對青岑，路穿修竹林。野人猶愛宿，懶衲兀如瘖。
曉枕猿呼覺，春情蝶自深。病身能用力，殘雪水涯凜。

夜歸

從前此會更應稀清話高談玉塵揮是春遊無月
夜一天星斗逐吾歸又

翠嶽夜途行徑微兩三儔侶自相依歸來衾枕冷如
鐵徹曉谿嵐歛靜扉訪梅

溯洄古洞源杖履水流渾日々梅梢下蒼苔多屐痕

故鄉病中

青山深處家隣並只雲霞病不棄捐筆性唯耽嗜茶
澗邊蒼色樹籬下白紅葩一个礙禪寂寒林噪暮鴉

春日

一支野水万重峯抹了紅霞無罅縫行吟日暖眠似
醉也尋幽趣向村農又

林間八九聲幽鳥峯頂兩三片斷雲亭午田疇高唱
放犁鋤時有野夫耘觀棊

遲々春日暖羅幃棊者誰歟剝啄飛千頃平田鴉鷺
集十行堅陣虎龍圍紋楸坐對消愁思玉子相排藏
巧機世事由来彈指頃眼看勝敗死生違

從前此會更應稀清話高談玉塵揮是春遊無月
夜一天星斗逐吾歸又

翠嶽夜途行徑微兩三儔侶自相依歸來衾枕冷如
鐵徹曉谿嵐歛靜扉訪梅

溯洄古洞源杖履水流渾日々梅梢下蒼苔多屐痕

故鄉病中

青山深處家隣並只雲霞病不棄捐筆性唯耽嗜茶
澗邊蒼色樹籬下白紅葩一个礙禪寂寒林噪暮鴉

春日

一支野水万重峯抹了紅霞無罅縫行吟日暖眠似
醉也尋幽趣向村農又

林間八九聲幽鳥峯頂兩三片斷雲亭午田疇高唱
放犁鋤時有野夫耘觀棊

遲々春日暖羅幃棊者誰歟剝啄飛千頃平田鴉鷺
集十行堅陣虎龍圍紋楸坐對消愁思玉子相排藏
巧機世事由来彈指頃眼看勝敗死生違

貧家

細竹把茅額屋傾，我來敲戶喚無聲。想應有學道人，在門外塵埃掃地清。

廿八日大雪

戰退瓊龍散玉鱗，普天率土沒邊垠。今宵難作五更夢，鬼住村中高臥人。

雪後

雪後雲山望轉明，溪邊卜宅意弥清。晚來乘興子猷事，千歲寥寥無復賡。

正月晦日

貧家

細竹把茅額屋傾，我來敲戶喚無聲。想應有學道人，在門外塵埃掃地清。

廿八日大雪

戰退瓊龍散玉鱗，普天率土沒邊垠。今宵難作五更夢，鬼住村中高臥人。

雪後

雪後雲山望轉明，溪邊卜宅意弥清。晚來乘興子猷事，千歲寥寥無復賡。

正月晦日

九十韶光三十埃，談春笑口幾時開。今年幸有餘寒在，昨日南枝放野梅。

二月一日

三分春色二分初，日暖風和情自舒。莫怪葛絺手裁剪，詩囊尚作半生儲。

初聞鸞語

聲未碎兮吭未圓，朝來扣寂轉簾前。千山万嶂多喬木，為個詩人相報先。

見舊詩軸

東西南北付滄浪，鬧市閑林也不妨。五歲一千三十

九十韶光三十埃，談春笑口幾時開。今年幸有餘寒在，昨日南枝放野梅。

二月一日

三分春色二分初，日暖風和情自舒。莫怪葛絺手裁剪，詩囊尚作半生儲。

初聞鸞語

聲未碎兮吭未圓，朝來扣寂轉簾前。千山万嶂多喬木，為個詩人相報先。

見舊詩軸

東西南北付滄浪，鬧市閑林也不妨。五歲一千三十

首吟來詩思自飛颺

寄書南岳賴周叟報書未至言此遺懷

裁書遙寄一天涯鴻翼阻風相報遲未審頻々前日
信巧言定合見吾欺

言志

對論沈吟各自耽與他元是不同參天性所得誰能
變青出於藍青於藍

又

渠誠袖冊求名子我是耽詩逃世人畢竟如何分得
失詩詞費力冊醫貧

首吟來詩思自飛颺

寄書南岳賴周叟報書未至言此遺懷

裁書遙寄一天涯鴻翼阻風相報遲未審頻々前日
信巧言定合見吾欺

言志

對論沈吟各自耽與他元是不同參天性所得誰能
變青出於藍青於藍

又

渠誠袖冊求名子我是耽詩逃世人畢竟如何分得
失詩詞費力冊醫貧

聞鶯

流鶯正好擇花枝擺羽暖風隨意吹日々呢喃語何
事報吾火急作新詩

山家

信美元吾土雲山圍作屏鸞林万竿竹蝶宿一方庭
枯草逢春茁名花自雨馨殘生多臥病猶此八旬停

覺聞鶯

午睡覺來向紙窓夢中鶯語耳猶聒忽聞烟樹危峯
裏巧舌數聲無等雙

讀書

聞鶯

流鶯正好擇花枝擺羽暖風隨意吹日々呢喃語何
事報吾火急作新詩

山家

信美元吾土雲山圍作屏鸞林万竿竹蝶宿一方庭
枯草逢春茁名花自雨馨殘生多臥病猶此八旬停

覺聞鶯

午睡覺來向紙窓夢中鶯語耳猶聒忽聞烟樹危峯
裏巧舌數聲無等雙

讀書

世事紛々那得牽心如秋月碧空懸遊山頑水是非
外也映暖陽窺舊篇

即事

春光不厭野人家籬際梅枝開好華黃鳥似知主人
意圓吭日々自諠詳

夜起

摩眼剛興夢寐中旋開懷抱受和風今宵山月去何
處徹曉門庭細雨濛

夜雨

不結夢魂情渺茫四簷風雨夜浪々曉天不寐猶惆

悵明日路泥三尺強

池上訪人

水滿平池堤路長此心疾去迹茫茫曳藜戶外問童
子笑指北村松葛牆

途中遇雨

田頭枯草可埋腰暖雨引春來柳條雖入村家求庇
廡前途猶是里程遙

攝平野有融通大念佛寺宮構半成十二日

過于此

營構應須絕古今柱根玉礎榑頭金彌陀願海深而

世事紛々那得牽心如秋月碧空懸遊山頑水是非
外也映暖陽窺舊篇

即事

春光不厭野人家籬際梅枝開好華黃鳥似知主人
意圓吭日々自諠詳

夜起

摩眼剛興夢寐中旋開懷抱受和風今宵山月去何
處徹曉門庭細雨濛

夜雨

不結夢魂情渺茫四簷風雨夜浪々曉天不寐猶惆

悵明日路泥三尺強

池上訪人

水滿平池堤路長此心疾去迹茫茫曳藜戶外問童
子笑指北村松葛牆

途中遇雨

田頭枯草可埋腰暖雨引春來柳條雖入村家求庇
廡前途猶是里程遙

攝平野有融通大念佛寺宮構半成十二日

過于此

營構應須絕古今柱根玉礎榑頭金彌陀願海深而

廣傑棟飛薨載不沈

途中即事

綺麗山川近帝畿和霞漁子立苔磯
數叢茅屋野田外開口高呼你馬歸

自橋本河流到鳥羽

片席懸空滿腹春乱流虛棹水粼粼
舟人鼾睡白鷗下今日何為更問津

入京

花蒸和日樹萬古此山川商賈雜街巷
士人競陌阡行々佳趣溢歩々好詩牽
不管富家笑杖頭只百錢

東福寺拜佛涅槃像
是明兆之所畫也

五丈碧綃懸大清走之男女眼皆驚
二千六百歲時久滅後彌光赫々名

遊禪林寺

苔埋古殿大禪林千載叡師昭
德音不是青松圍四壁清風何地滌煩襟

出京到伏見

東風吹雨裏山顛逆旅擔夫不息肩
伏見驛亭人馬鬧枯筇競走到來先

舟中見初月

廣 傑棟飛薨載不沈

途中即事

綺麗山川近帝畿 和霞漁子立 苔磯 數叢茅屋野田
外 開口高呼你馬歸

自橋本河流到鳥羽

片席懸空滿腹春 乱流虚棹水粼粼 舟人鼾睡白鷗
下 今日何為更問津

入京

花蒸和日樹 萬古此山川 商賈雜街巷 士人競陌阡
行々佳趣溢 歩々好詩牽 不管富家笑 杖頭只百錢

東福寺拜佛涅槃像
是明兆之所畫也

五丈碧綃懸大清 走之男女眼皆驚 二千六百歲時
久滅後彌光赫々名

遊禪林寺

苔埋古殿大禪林 千載叡師昭 德音 不是青松圍四
壁 清風何地滌煩襟

出京到伏見

東風吹雨裏山顛 逆旅擔夫不息肩 伏見驛亭人馬
鬧 枯筇競走到來先

舟中見初月

峯頭月上團々玉柱浮流實一般多少鷺鷥呼不起
空明却異舊時看

道頓堀見歌舞妓

這個圓通微妙吟梵音勝彼世間音童男童女等流
質利海周覃悲愍心

過境浦之次初會于宗左衛門

大鵬高翥快陵摩調古陽春白雪歌欲試到頭那一
句何知袖裏藏青蛇

重上金剛山謁了性大德

重上金剛頂依前黛色新南洲豁原野西海沒邊垠

群鳥下齋鼓眾禽轉法輪覺山不傾動苦問坐禪人

寬文乙巳春二月廿六日再奉拜了性遮梨

慈采于金剛山寺然而遮梨見示一頌褒贊

鄙陋拜而閱則文峰生風筆陣無敵自慙構

樞庸才不當其褒賞不得點止課虛騁毫以

奉贖鈞慈伏乞芟詳

明々妙句徹三玄灸手神光難近前嗟我抵羊觸藩
質空逢金口吐青蓮

同會逢時

再來今日接眉時二十年前耻舊記記得驅鳥場圍

峯頭月上正團々玉柱浮流實一般多少鷺鷥呼不起
空明却異旧時看

道頓堀見歌舞妓

這個圓通微妙吟梵音勝彼世間音童男童女等流
質利海周覃悲愍心

過境浦之次初會于宗左衛門

大鵬高翥快陵摩調古陽春白雪歌欲試到頭那一
句何知袖裏藏青蛇

重上金剛山謁了性大德

重上金剛頂依前黛色新南洲豁原野西海沒邊垠

群鳥下齋鼓眾禽轉法輪覺山不傾動若問坐禪人

寬文乙巳春二月廿六日再奉拜了性遮梨

慈采于金剛山寺然而遮梨見示一頌褒贊

鄙陋拜而閱則文峰生風筆陣無敵自慙構

樞庸才不當其褒賞不得點止課虛騁毫以

奉贖鈞慈伏乞芟詳

明々妙句徹三玄灸手神光難近前嗟我抵羊觸藩
質空逢金口吐青蓮

同會逢時

再來今日接眉時二十年前耻旧知記得驅鳥場圍

裏贊揚空費兩篇詩

雨中贈大德了性師

妙應威神豈有方，迷人向外枉悲傷。高僧靜話閑窓下，三日曼陀滿洞房。

和了性和尚垂示韻

默々無言真說法，威音雷震駭天神。何曾眼裏容微翳，有幸目前見大椿。綠水青山皆舊識，清風明月本同倫。請看禪寂無塵地，鵲噪鴉鳴句子新。

桃華

暖日烘成醉頰，酡風派詞客奈渠何。山南山北桃千

樹有色無香恨尚多

明日將歸于南山

法鼓如雷聽尚欣，南山佳氣日氤氳。歸襟他後巉岳路，回首河陽是白雲。

南山道中

今日行裝意放哉，和風飄袂紀紀川。限金衣公子增色，否飛自益菁華裏回。

又

前路實雖遠，途程行已消。掛包足難進，扶杖汗如澆。叢竹圍岩屋，獨松立野燒。險難寧可數，林外馬蕭々。

裏贊揚空費兩篇詩

雨中贈大德了性師

妙應威神豈有方，迷人向外枉悲傷。高僧靜話閑窓下，三日曼陀滿洞房。

和了性和尚垂示韻

默々無言真說法，威音雷震駭天神。何曾眼裏容微翳，有幸目前見大椿。綠水青山皆舊識，清風明月本同倫。請看禪寂無塵地，鵲噪鴉鳴句子新。

桃華

暖日烘成醉頰，酡風流詞客奈渠何。山南山北桃千

樹有色無香恨尚多

明日將歸于南山

法鼓如雷聽尚欣，南山佳氣日氤氳。歸襟他後巉岳路，回首河陽是白雲。

南山道中

今日行裝意放哉，和風飄袂紀紀川。限金衣公子增色，否飛自益菁華裏回。

又

前路實雖遠，途程行已消。掛包足難進，扶杖汗如澆。叢竹圍岩屋，獨松立野燒。險難寧可數，林外馬蕭々。

不動坂

四十八盤自古稱、薜蘿路暗、石峻嶒、行人多少、當此
險、仰見巉岩、不得登。

廿八日不動堂初聞子規

韶光疑鳥過、佛舍避人譁、禪坐尚能起、久遊應始嗟、
喚名依茂樹、啼血向華枝、何事聲々急、暖曦誰敢遮、

安陪山修文殊五洛又法

德聲震古今、飛閣俯高林、持呪瑜伽寂、斷迷般若深、
更無塵累絆、豈受世緣侵、耿耿長明燭、表吾一寸心、

又

不動坂

四十八盤自古稱ス、薜蘿路暗シテ、石峻嶒、行人多少、當此
險、仰見巉岩、不得登。

廿八日不動堂初聞子規

韶光疑鳥過、佛舍避人譁、禪坐尚能起、久遊心始嗟、
喚名依茂樹、啼血向華枝、何事声々急、暖曦誰敢遮、

安陪山修文殊五洛又法

德聲震古今、飛閣俯高林、持呪瑜伽寂、斷迷般若深、
更無塵累絆、豈受世緣侵、耿耿長明燭、表吾一寸心、

又

自元神用挽春回、况是嘗艱千里來、幽鳥似知此深
意、妙音時答、白雲堆

省親逢重陽

東籬黃菊北堂萱、落葉堪餐德、可尊來歲此、時猶在
否、折將尚獻露枝繁、

雪

門庭白雪尚紛々、爐火跨來陽欲曛、本是山深無種
竹、攪眠剝啄未曾聞、

明年孟春之初、天野宮有每歲例規之五問
一答之論議、其丁堅義之人者、予所素相知、

自元神用挽春回、况是嘗艱千里來、幽鳥似知此深
意、妙音時答、白雲堆

省親逢重陽

東籬黃菊北堂萱、落葉堪餐德、可尊來歲此、時猶在
否、折將尚獻露枝繁、

雪

門庭白雪尚紛々、爐火跨來陽欲曛、本是山深無種
竹、攪眠剝啄未曾聞、

明年孟春之初、天野宮有每歲例規之五問
一答之論議、其丁堅義之人者、予所素相知、

之空性子也其第一答謂遍計所執其第二
答謂三自大乘此之二條一重囑予書之竟
日達夕引及曉天稍畢事矣因述一偈示之
手凍指龜非易書雲圍四壁曉鐘餘請君若有活人
劍斫去煩襟勿見疎
賈金剛三昧院方丈見和予贈空性子韻
碌々曬無空洞書世紛那更有三條十分褒賞不應
賈世識吾儕麗且疎
賈韻于懲勸丈見再和
聰敏能諳万卷書瓊瑤吐出有贏餘
鴛鴦與驥追何

及到是深慙筆硯疎
呈上金剛三昧院主懲勸梵師法座下不肖
久仰德風山斗之情夙夕不息豈圖苦賜恩
慈見和鄙韻再稟厚惠感荷有餘卒述一章
聊備笑具切希莞留
東南山信美松樹託幽嶠陵雪出塵質傲霜拔俗標
唯容集鷺鶴何敢宿鷓鴣法廈若重建棟梁豈敢要
歲暮
問歲何之天一涯日車行已沒烟霾寒暄雖是無情
物却似去留吾與偕

之空性子也其第一答謂遍計所執其第二
答謂三自大乘此之二條一重囑予書之竟
日達夕引及曉天稍畢事矣因述一偈示之
手凍指龜非易書雲圍四壁曉鐘餘請君若有活人
劍斫去煩襟勿見疎
賈金剛三昧院方丈見和予贈空性子韻
碌々曬無空洞書世紛那更有三條十分褒賞不應
賈世識吾儕麗且疎
賈韻于懲勸丈見再和
聰敏能諳万卷書瓊瑤吐出有贏餘
鴛鴦與驥追何

及到是深慙筆硯疎
呈上金剛三昧院主懲勸梵師法座下不肖
久仰德風山斗之情夙夕不息豈圖苦賜恩
慈見和鄙韻再稟厚惠感荷有餘卒述一章
聊備笑具切希莞留
東南山信美松樹託幽嶠陵雪出塵質傲霜拔俗標
唯容集鷺鶴何敢宿鷓鴣法廈若重建棟梁豈敢要
歲暮
問歲何之天一涯日車行已沒烟霾寒暄雖是無情
物却似去留吾與偕

法樂寺為妙音寺之牒

法樂寺

一宜以當寺名景福山妙音院兼又祈檀君真田

氏武門繁榮事

右得彼寺沙門覺傳解狀俛謹檢案內當寺者秘密
上乘興隆奇區妙音天女利見靈宇也叢詞奧秘千
歲德熏扇馨香于霜杉雪檜之風靜龕幽邃万劫法
鼓和音韻於春禽秋蟲之響桂深冬燠神足之所遊
息松疎夏寒靈心之攸往還也武臣真田氏世々相
傳作鎮斯境而前伊賀太守源信澄朝臣竭悃於此

法樂寺為妙音寺之牒

法樂寺

一宜以當寺名景福山妙音院兼又祈檀君真田

氏武門繁榮事

右得彼寺沙門覺傳解狀俛謹檢案內當寺者秘密
上乘興隆奇區妙音天女利見靈宇也叢詞奧秘千
歲德熏扇馨香于霜杉雪檜之風靜龕幽邃万劫法
鼓和音韻於春禽秋蟲之響桂深冬燠神足之所遊
息松疎夏寒靈心之攸往還也武臣真田氏世々相
傳作鎮斯境而前伊賀太守源信澄朝臣竭悃於此

勝處執信于此妙窟賜資財而供衣服齋齋田以給
糧食予謂醍醐教葉厥力不虛聖尊加被其益何妄
書曰以介福望請自今已後山名景福院号妙音矣
尔乃花香不退逾增妙音大天之神光修觀無懈長
介檀主源君之景福也者貧道不拒依請者寺宜承
知牒到準狀故牒寬文五乙己年八月七日高野山
蓮上院第二十一世主權大僧都覺秀

勝處執信于此妙窟賜資財而供衣服齋齋田以給
糧食予謂醍醐教葉厥力不虛聖尊加被其益何妄
書曰以介福望請自今已後山名景福院号妙音矣
尔乃花香不退逾增妙音大天之神光修觀無懈長
介檀主源君之景福也者貧道不拒依請者寺宜承
知牒到準狀故牒寬文五乙己年八月七日高野山
蓮上院第二十一世主權大僧都覺秀

寛文六丙午年 行年二十七

元旦

元來歲月易消磨二十七年如鳥過堪笑祝春全盛
子即今倏見髮皓

修瑜伽觀

酷病群動狂馳驅璞鼠名同紫奪朱不識真心辨諸
事却向赤水訪玄珠

春雪

青林不似昨朝看欲滴猶凝屋瓦端遊子天涯慘春
處笠檐重壓願雲難

寛文六丙午年 行年二十七

元旦

元來歲月易消磨二十七年如鳥過堪笑祝春全盛
子即今倏見髮皓

修瑜伽觀

酷病群動狂馳驅璞鼠名同紫奪朱不識真心辨諸
事却向赤水訪玄珠

春雪

青林不似昨朝看欲滴猶凝屋瓦端遊子天涯慘春
處笠檐重壓願雲難

酬雋良文見和予春雪韻

吐出明珠使我看無邊景趣入毫端勸君勤到詩堂
奧難似太行々路難

雪夜烹茶

四面飛簷擁玉塵更鐘聲翳隔東隣松風乱遠沙鍋
處誰識爐邊別有春

病中懷人

情話徒乖爐火紅旋添藥裏減頭風誰識千里燈前
影飛入病僧魂夢中

仲春即興

酬雋良文見和予春雪韻

吐出明珠使我看無邊景趣入毫端勸君勤到詩堂
奧難似太行々路難

雪夜烹茶

四面飛簷擁玉塵更鐘聲翳隔東隣松風乱遠沙鍋
處誰識爐邊別有春

病中懷人

情話徒乖爐火紅旋添藥裏減頭風誰識千里燈前
影飛入病僧魂夢中

仲春即興

人來問在板扉前詩夢驚回剛又眠不是要須續殘
句為嫌諛開似春廓

和周辨偶成韻

幽絕無塵禪寂居窓篩暖日自清虛莫言空對燈檠
坐我亦蛛絲滿蠹書

境浦歸路

籃輿載我疾如風瞬息行過數里中眼界青山知幾
許渺茫春意了無窮

秃里見水碓車

衝流寫得走蛇真尺闌能推一丈輪我願大倉千萬

斛晨昏春孰濟時貧

大野記所見

茅棟何人宅衡門多送迎歸牛卜野意出鳥稱春情
麥隴波猶未松林日半傾景光無限好早晚再斯行

和周辨子初聞鶯韻

懶衲不貪功与名烟霞冰雪適吾情今朝將底詩料
供春半初聞第一鶯

二月十二日雪

四面紛紛雪千山看改容遷人曾慨慷行旅自躑躅
鹿透斷牆入雀窺破牖衝今春風景冷却過去年冬

人來問在板扉前詩夢驚回剛又眠不是要須續殘
句為嫌諛開似春廓

和周辨偶成韻

幽絕無塵禪寂居窓篩暖日自清虛莫言空對燈檠
坐我亦蛛絲滿蠹書

境浦歸路

籃輿載我疾如風瞬息行過數里中眼界青山知幾
許渺茫春意了無窮

秃里見水碓車

衝流寫得走蛇真尺闌能推一丈輪我願大倉千萬

斛晨昏春孰濟時貧

大野記所見

茅棟何人宅衡門多送迎歸牛卜野意出鳥稱春情
麥隴波猶未松林日半傾景光無限好早晚再斯行

和周辨子初聞鶯韻

懶衲不貪功与名烟霞冰雪適吾情今朝將底詩料
供春半初聞第一鶯

二月十二日雪

四面紛紛雪千山看改容遷人曾慨慷行旅自躑躅
鹿透斷牆入雀窺破牖衝今春風景冷却過去年冬

和真謙丈元旦二首

醒了山僧半日眠，卷舒詩軸地爐邊。文章相似清風在，掃蕩愁襟不盡烟。

白雲第幾重，靜院上東峰。密乘吾欲欲，秘藏君所宗。筆凌河漢淨，句寫景光濃。和韻相酬處，燈前筆放封。

和春雨韻

濕案濡書晚未開，吹而未起硯中埃。殷勤為我慰寒寂，勾引和風透牖來。

和春望韻

心中頭緒百千結，天末渺茫思友時。滿塢紅華看的眼

和真謙丈元旦二首

醒了_{シテ}山僧半日_ノ眠_ヲ，卷_ニ舒_ス詩軸_ヲ地爐_ノ邊，文章相似_{タルコト}清風_ニ在_リ，掃蕩_ス愁襟_不盡_ノ烟。

白雲第幾重_ツ，靜院_ト上_ニ東峰_ヲ，密乘_ハ吾_カ欲_レ欲_{スル}，秘藏_ハ君_カ所_{ナリ}宗_トスル。筆凌_ハ河漢_ノ淨_ヲ，句_ハ寫_ス景光_ノ濃_{ナルヲ}，和_レ韻_ヲ相酬_ル處，燈前_ニ屢_ク放_ツ封_ヲ。

和春雨韻

濕_レ案濡_レ書晚_{マテ}未_レ開_ケ，吹_レ而_未起_レ硯中_ノ埃，殷勤_ニ為_レ我_カ慰_メ寒寂_ヲ，勾_ニ引_シ和風_ノ透_ル牖_ヲ來。

和春望韻

心中_ノ頭緒百千結，天末_ノ渺茫_{タリ}思_レ友時，滿塢_ノ紅華_看く_の的

爍夾堤，綠柳自離披。暮雲半斷，空林杪夕照猶殘。春樹枝雙袖獨籠，立欄角歸禽數盡，憶前期。

暴雨疾風自且達暮

入窻透戶亂縱橫，聒打薨檐貧已傾。終日闔門無一事，愁風苦雨不須晴。

偶成

三盃茗粥一檠燈，筆硯唯供半夜僧。不管人間榮辱事，詩書堆案每相仍。

仏涅槃頌

塵刹界中無處所，真身何敢有來去。不知四十九年

爍_レ夾_レ堤_ヲ，綠柳_自離披_ク，暮雲_半斷_フ空林_ノ杪，夕照_猶殘_ル。春樹_ノ枝_ニ雙袖_独籠_リ，立_ニ欄角_ニ，歸禽_數盡_{シテ}，憶_ニ前期_ヲ。

暴雨疾風自且達暮

入_レ窻_ニ透_レ戶_ニ亂_レ縱橫_ク，聒_ク打_ニ薨檐_ヲ貧_己傾_ク，終日_闔門_ヲ無_ニ一事_ヲ，愁風_苦雨_不須_レ晴_{ルコトヲ}。

偶成

三盃_ノ茗粥_一檠_ノ燈_，筆硯_唯供_ス半夜_ノ僧_，不_レ管_ニ人間_ノ榮辱_ヲ，詩書_堆案_ニ每_ニ相_ヒ仍_ル。

仏涅槃頌

塵刹界_ノ中_無處所_ヲ，真身_何敢_テ有_ニ來去_ヲ，不_レ知_ニ四十九年_ヲ，

非_レ半夜猶強_テ成_ニ寐語_一

弘法大師影贊二首

航海不_レ辭_セ難_ク辛_ク歸_ル時_ニ稠_ク載_ル舍_レ那_ノ真_ニ到_ル今_ニ滿_ル眼_ニ密_ニ林_一

蠹_レ更_ニ向_テ何_レ處_ニ重_ク問_フ津_ヲ

潛_レ形_ノ晦_レ迹_レ入_ル莓_ニ苔_ニ八_ニ百_ニ餘_ニ年_ニ似_ス死_ス灰_ニ兒_ノ輩_カ觀_テ知_ル唯_ニ這_ニ

是_レ無_レ邊_ノ神_ノ用_ヲ挽_ク何_レ回_ラ

贈境津舊知寄傲叟

鐘_ニ到_ル三_ニ更_ニ猶_モ未_シ眠_ル淨_ク窓_ニ無_ク暑_ク倍_ク凜_ク然_ル願_{ハシ}言_フ施_ス與_テ無_レ蚊_ノ地_一

夜_ニ使_テ閑_ル人_ヲ快_ク坐_シ禪_一

聽夜雨有恨

相_ニ遇_テ佳_人不_レ平_ヲ天_ノ涯_ノ地_ノ角_ノ遠_ク思_{ハシ}榮_ニ驚_ル回_ル万_ニ里_ニ江_ノ濱_一

寄井上松齋

拜_啓松_齋大_丈硯_石今_ニ朝_ニ久_ク霖_初止_テ天_ノ色_ノ快_ク

晴_未審_動履_佳勝_否即_今敬_烹雲_漚恭_請賁_賁

臨_若有_校書_之間_則與_真精_泰春_朝識_之三_子

同_輿而_來光_矮軒_又附_短章_于楮_尾伏_乞

芟評

滌_甌洗_碗掃_軒迎_宿雨_天涯_况快_晴苦_報未_看魚_眼
沸_心知_兩腋_有風_生

非_レナレコトヲ 半夜猶強_テ成_ニス寐語_一

弘法大師影贊二首

航_{シテ}海_ニ不_レ辭_セ難_ク辛_ク歸_ル時_ニ稠_ク載_ル舍_レ那_ノ真_ニ到_ル今_ニ滿_ル眼_ニ密_ニ林_一

蠹_{カナリ}更_ニ向_テ何_レ處_ニ重_ク問_フ津_ヲ

潛_レ形_ノ晦_レ迹_レ入_ル莓_ニ苔_ニ八_ニ百_ニ餘_ニ年_ニ似_ス死_ス灰_ニ兒_ノ輩_カ觀_テ知_ル唯_ニ這_ニ

是_レ無_レ邊_ノ神_ノ用_ヲ挽_ク何_レ回_ラ

贈境津旧知寄傲叟

鐘_ニ到_ル三_ニ更_ニ猶_モ未_シ眠_ル淨_ク窓_ニ無_ク暑_ク倍_ク凜_ク然_ル願_{ハシ}言_フ施_ス與_テ無_レ蚊_ノ地_一

夜_ニ使_テ閑_ル人_ヲ快_ク坐_シ禪_一

聽夜雨有恨

相_ニ遇_テ佳_人不_レ平_ヲ天_ノ涯_ノ地_ノ角_ノ遠_ク思_{ハシ}榮_ニ驚_ル回_ル万_ニ里_ニ江_ノ濱_一

寄井上松齋

拜_啓松_齋大_丈ノ硯_石今_ニ朝_ニ久_ク霖_初メテ天_ノ色_ノ快_ク

晴_未審_動履_佳勝_否即_今敬_烹雲_漚ヲ恭_請ヲ賁_賁

臨_若有_校書_之間_則與_真精_泰春_朝識_之三_子

同_輿而_來光_矮軒_又附_短章_于楮_尾ニ伏_乞

芟評

滌_レ甌_ヲ洗_レ碗_ヲ掃_レ軒_ヲ迎_レ宿_ル雨_天涯_况快_晴ナルヲヤ 苦_ニ報_ス來_テ看_ル魚_ノ眼_ノ
沸_レ心_ヲ知_レ兩_ノ腋_ニ有_{コトヲ}風_ノ生_{スル}

聯句五十韻已成送其軸于松齋

聯句功成忽送軸此時何暇三過讀運斤諸雜妄言
荆恐有門前誹謗木

和井上氏被寄

冥々霖雨晝遮明今月能逢幾日晴履跡滿門推不
去憑誰說與恁中情

重和被寄

筆鋒電駛照肝明開卷旋賢積雨晴再日此時將底
謝再投瓊玖故人情

昨夜寒蛩啼徹夢魂驚回悲愁若湧因而得

句書上井上氏切鞞隳枯

四壁寒蛩徹五更間齋北客意須驚秋宵堪恨還堪
賞無復前山蜀魄聲

弘法大師畫像贊

千古萬古道德輝煌不測神用孰知行藏

秋雨聯句五十韻成因而題尾寄井上氏

自慙碌々忤君心晨夜支頤徒苦吟亮恕無章無所
裁這般妙處渺難尋

和良音高野山詩

若非求自己觸處盡皆難樗櫟老千嶂檜杉楮萬山

聯句五十韻已成送其軸于松齋

聯句功成忽送軸此時何暇三過讀運斤諸雜妄言
荆恐有門前誹謗木

和井上氏被寄

冥々霖雨晝遮明今月能逢幾日晴履跡滿門推不
去憑誰說與恁中情

重和被寄

筆鋒電駛照肝明開卷旋賢積雨晴再日此時將底
謝再投瓊玖故人情

昨夜寒蛩啼徹夢魂驚回悲愁若湧因而得

句書上井上氏切鞞隳枯

四壁寒蛩徹五更間齋北客意須驚秋宵堪恨還堪
賞無復前山蜀魄聲

弘法大師畫像贊

千古萬古道德輝煌不測神用孰知行藏

秋雨聯句五十韻成因而題尾寄井上氏

自慙碌々忤君心晨夜支頤徒苦吟亮恕無章無所
裁這般妙處渺難尋

和良音高野山詩

若非求自己觸處盡皆難樗櫟老千嶂檜杉楮萬山

豈關他境開合足我心周子是嫌喧者何為住此

奉餞信龍師飛錫于作府

忘身忘世去悠悠何有中心一点愁旅館掃清宜憩
息乘籃行穩好優遊雲山不盡入詩句鷗鷺無邊逐
棹謳爭奈明朝飛錫後高談阻聽寺門幽

九日遇雨

行藏似慣古人蹤無奈朝來宿雨濃貪看黃華飄露
葉不知烏帽落西風
遠檐愁雨伴青嵐寂寞東籬見不堪憶得鄉粉最高
處空貽美酒一年慙

答了栢先生

苦雨滿窓推案之詩書懶攬竟日無客柴門之
剥啄絕聽茲有盛介偶傳一軸則了栢先生之
見忝和走九日之鄙韻之詩也筆下龍虎交馳
風雲之奇句中精神深徹仙靈之奧走素江湖
散人未成一事過蒙褒評山野浪子何當丰言
深益愧報雖知僭逾漫酬高詩
吾生元自嗜烟嵐塵裏紛囂性不堪從一拜趨金玉
采昔年伎倆對君慙
又楮尾一律奉汗光韻

豈關他境開合足我心閑子是嫌喧者何為住此

奉餞信龍師飛錫于作府

忘身忘世去悠悠何有中心一点愁旅館掃清宜憩
息乘籃行穩好優遊雲山不盡入詩句鷗鷺無邊逐
棹謳爭奈明朝飛錫後高談阻聽寺門幽

九日遇雨

行藏似慣古人蹤無奈朝來宿雨濃貪看黃華飄露
葉不知烏帽落西風
遠檐愁雨伴青嵐寂寞東籬見不堪憶得鄉粉最高
處空貽美酒一年慙

答了栢先生

苦雨滿窓推案之詩書懶攬竟日無客柴門之
剥啄絕聽茲有盛介偶傳一軸則了栢先生之
見忝和走九日之鄙韻之詩也筆下龍虎交馳
風雲之奇句中精神深徹仙靈之奧走素江湖
散人未成一事過蒙褒評山野浪子何當丰言
深益愧報雖知僭逾漫酬高詩
吾生元自嗜烟嵐塵裏紛囂性不堪從一拜趨金玉
采昔年伎倆對君慙
又楮尾一律奉汗光韻

斯節寔嘉節何時亦此時叩闕泉北地含筆紀南垂
賴遇相知客莫違夙昔期頭風三五日頓愈一篇詩

九月十五夜

木落千林淒且涼滿庭寒月夜蒼蒼
搯節苦想吟難就小伎却乖清興長

同十六夜

南山雨後轉秋風滿目深愁事々空
幸是今宵情半減月明不辨墜殘楓

酬了栢先生

解袂以來曠如歷稔不堪渴慕丰神
惟徒仰面看

屋梁之月翹足望日暮之雲耳愧不知鴻猷至時
無通問安慚愧何言忽辱賜琅函并警律一章寔
蓬華之光彩几案之華耀何賜加焉欣慰々々又
况以采葛之台悃耶貧道之於足下采之者蕭乎
艾耶傾仰殊甚雖地阻胡越身濶參商豈外之耶
且述蕪辭恭攀嚴韻伏希隱括即辰紅楓染錦前
嶂光景看之不厭黃葉映雲近林風致賞之猶餘
請早迴嚴駕吟之賞之亦吾山之風光日以積襲
不亦快乎臨書汗流忽々不宣

獨行閑寺晚緬憶僻村秋禽語近松幌農收勤芋疇

斯節寔嘉節何時亦此時叩闕泉北地含筆紀南垂
賴遇相知客莫違夙昔期頭風三五日頓愈一篇詩

九月十五夜

木落千林淒且涼滿庭寒月夜蒼蒼
搯節苦想吟難就小伎却乖清興長

同十六夜

南山雨後轉秋風滿目深愁事々空
幸是今宵情半減月明不辨墜殘楓

酬了栢先生

解袂以來曠如歷稔不堪渴慕丰神
惟徒仰面看

屋梁之月翹足望日暮之雲耳愧不知鴻猷至時
無通問安慚愧何言忽辱賜琅函并警律一章寔
蓬華之光彩几案之華耀何賜加焉欣慰々々又
况以采葛之台悃耶貧道之於足下采之者蕭乎
艾耶傾仰殊甚雖地阻胡越身濶參商豈外之耶
且述蕪辭恭攀嚴韻伏希隱括即辰紅楓染錦前
嶂光景看之不厭黃葉映雲近林風致賞之猶餘
請早迴嚴駕吟之賞之亦吾山之風光日以積襲
不亦快乎臨書汗流忽々不宣

獨行閑寺晚緬憶僻村秋禽語近松幌農收勤芋疇

眸凝林藪勝耳洗石泉流。搯筆慚相識。汗顏何日休。

又附一律以代夕話

翩墜葉晚辞柯。想像東鄉幽趣多。松菌日芘山靈麝。某枰宵賭野人過。宅隣青嶂磨長劍。門對碧溪鳴佩珂。安得輕飛黃鶴舉。閑軒相與跨茶鍋。

傾來拙恙重累。於是幸賴了栢大國手之親診。旋得減煩不可不趨。而謝卒書蜂腰兩絕。以述愚悃。

其一

重被怯寒欣日暄。此心將合對誰言。病來還覺殊多味。窓靜不聞塵事喧。

其二

吾命追隨歲月徂。朝饘暮粥苦如荼。因知方劑頓消疾。展翼凍蠅透藥鑪。

和了栢韻

誰有胸中万卷堆。兀然隱几似瘡哉。世間不復無知己。忽寄琅玕落手來。

贈了栢丈人

爐侶探冰無暖氣。衾如擁鐵巨攀扳。夜來頻喘為何故。起見雪花圍四山。

眸凝林藪勝耳洗石泉流。搯筆慚相識。汗顏何日休。

又附一律以代夕話

翩々墜葉晚辞柯。想像東鄉幽趣多。松菌日芘山靈麝。某枰宵賭野人過。宅隣青嶂磨長劍。門對碧溪鳴佩珂。安得輕飛黃鶴舉。閑軒相與跨茶鍋。

傾來拙恙重累。於是幸賴了栢大國手之親診。旋得減煩不可不趨。而謝卒書蜂腰兩絕。以述愚悃。

其一

重被怯寒欣日暄。此心將合對誰言。病來還覺殊多味。窓靜不聞塵事喧。

其二

吾命追隨歲月徂。朝饘暮粥苦如荼。因知方劑頓消疾。展翼凍蠅透藥鑪。

和了栢韻

誰有胸中万卷堆。兀然隱几似瘡哉。世間不復無知己。忽寄琅玕落手來。

贈了栢丈人

爐侶探冰無暖氣。衾如擁鐵巨攀扳。夜來頻喘為何故。起見雪花圍四山。

寬文七丁未年 行年二十九

南院修覆記

吾院之不動尊者本祖弘法大師所親刻彫之靈像也異賊遁逃宇内入寧聖風遠被日赫照一是忿怒王之威驗也宥盛長海二師者為吾山兩門之主領稱自家一時之俊髦欲報之德有稔于茲於是告滿寺衆衆僉肯諾因寄於脇谷一區充之餉供香燈是乃前檢校全秀住持吾寺之時也秀師開榛墾田夷莽徙民建丹生高野二神之祠暨于永世作之鎮焉

寬文七丁未年 行年二十九

南院修覆記

吾院之不動尊者本祖弘法大師所親刻彫之靈像也異賊遁逃宇内入寧聖風遠被日赫照一是忿怒王之威驗也宥盛長海二師者為吾山兩門之主領稱自家一時之俊髦欲報之德有稔于茲於是告滿寺衆衆僉肯諾因寄於脇谷一區充之餉供香燈是乃前檢校全秀住持吾寺之時也秀師開榛墾田夷莽徙民建丹生高野二神之祠暨于永世作之鎮焉

創造之勲可謂勤矣歲歷六七隣村鄉氓鬱而憑怒濫犯疆域千斤万斧爭競楮山虐害罔極制之無據先師堯遍雖不忍之情動乎中而止矣予不忍非理之劫奪告訴衆僧以求禁禦衆僧不肯添薪沃油滋熾猛矣唯有釈迦文院王朝遍阿闍梨深慨斯事勸志于予焉予陵雪冒霜不勞跋涉達武府而訴幕下請上裁再三遂而丙午之春有幕下旨永過絶不若者予之素願於此而足矣以嬰上事故神祠不違修治壇墀圯毀棟薨朽敗依斯今茲命匠沿襲舊製反宇秀棟煥乎可觀予冀事之所由後裔之知焉記而

創造之勲可謂勤矣歲歷六七隣村鄉氓鬱而憑怒濫犯疆域千斤万斧爭競楮山虐害罔極制之無據先師堯遍雖不忍之情動乎中而止矣予不忍非理之劫奪告訴衆僧以求禁禦衆僧不肯添薪沃油滋熾猛矣唯有釈迦文院王朝遍阿闍梨深慨斯事勸志于予焉予陵雪冒霜不勞跋涉達武府而訴幕下請上裁再三遂而丙午之春有幕下旨永過絶不若者予之素願於此而足矣以嬰上事故神祠不違修治壇墀圯毀棟薨朽敗依斯今茲命匠沿襲舊製反宇秀棟煥乎可觀予冀事之所由後裔之知焉記而

以貽云尔寬文第七龍集丁未六月廿一日金剛峯
寺南院第 世阿闍黎良意記

文選錦字錄自叙

昔人有言曰文者貫道之器也不深於斯道有至者
否矣寔惟前代聖哲之所作也文與道脉絡貫通當
世凡流之所著也道與文茅榛否塞矣是以古昔之
文則必本曩典率由舊章祖述前聖憲章往哲不有
未嘗一句一字經人之言也劉郎不漫題糕字虛負
人間一世豪蓋此之謂也雖然如予之菲學之輩可
祖述之詞句可蹈襲之文字不知復所以裁之則足

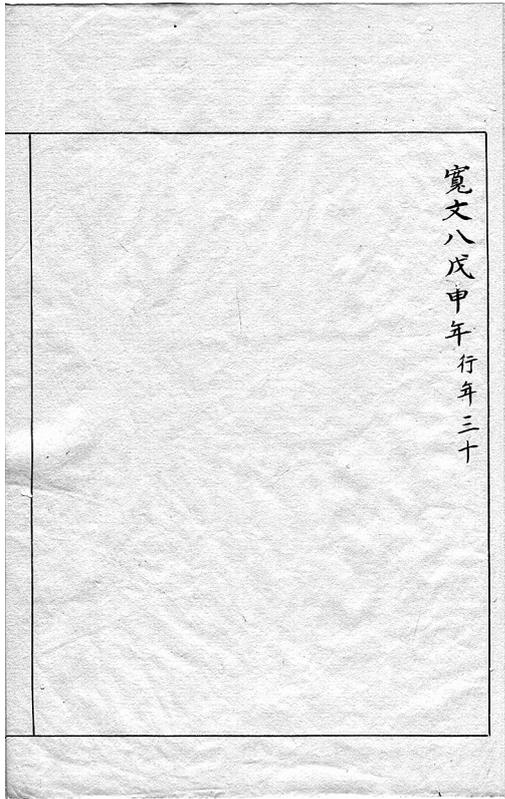
可歎歎焉吳興凌氏有文選錦字二十一卷誠是愚
蒙之一助也惜乎屢換謄寫累歷翻刻魚魯盈帙豕
亥溢編且亦採言之簡所釋之畧而予之所欲之者
或有不收之矣於是就六家之註博尋旁求禪補凌
氏以資庸才命之曰增續補注文選錦字是非為可
畏之為地只在滿予之夙志而已後之覽者勿責僭
踰云龍飛強圍協洽中秋既望焉求山人虛白子跋

以貽云尔寬文第七龍集丁未六月廿一日金剛峯
寺南院第 世阿闍黎良意記

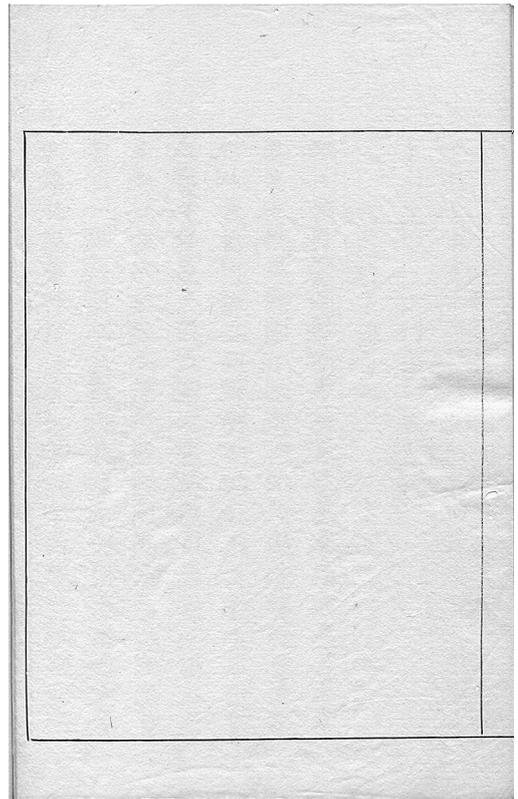
文選錦字錄自叙

昔人有言曰文者貫道之器也不深於斯道有至者
否矣寔惟前代聖哲之所作也文與道脉絡貫通當
世凡流之所著也道與文茅榛否塞矣是以古昔之
文則必本曩典率由舊章祖述前聖憲章往哲不有
未嘗一句一字經人之言也劉郎不漫題糕字虛負
人間一世豪蓋此之謂也雖然如予之菲學之輩可
祖述之詞句可蹈襲之文字不知復所以裁之則足

可歎歎焉吳興凌氏有文選錦字二十一卷誠是愚
蒙之一助也惜乎屢換謄寫累歷翻刻魚魯盈帙豕
亥溢編且亦採言之簡所釋之畧而予之所欲之者
或有不收之矣於是就六家之註博尋旁求禪補凌
氏以資庸才命之曰增續補注文選錦字是非為可
畏之為地只在滿予之夙志而已後之覽者勿責僭
踰云龍飛強圍協洽中秋既望焉求山人虛白子跋



寛文八戊申年 行年三十

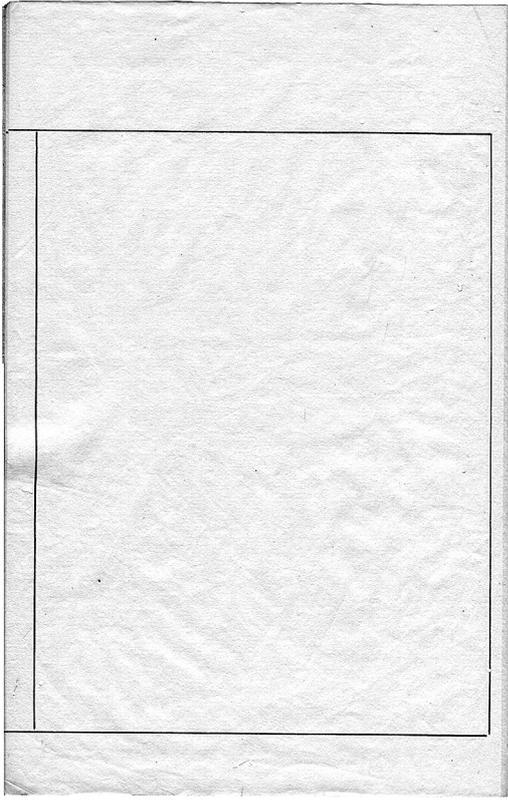


寛文八戊申年 行年三十

(白丁)

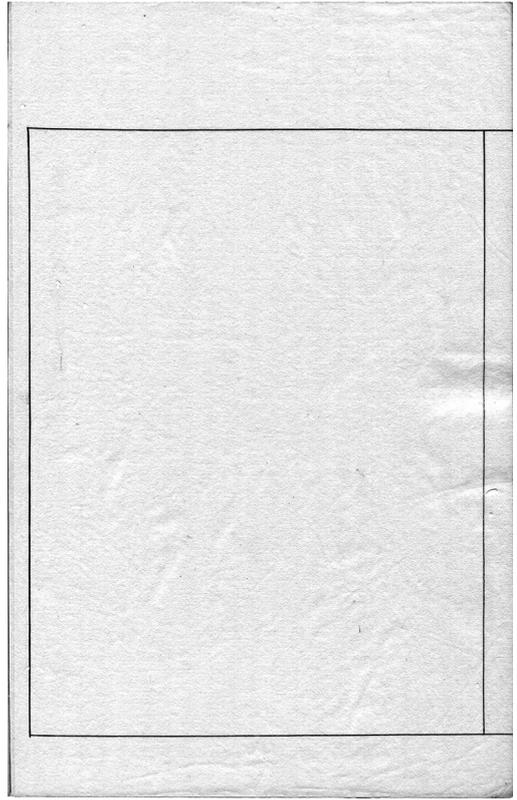
㊦
④
32
才

㊦
④
31
ウ



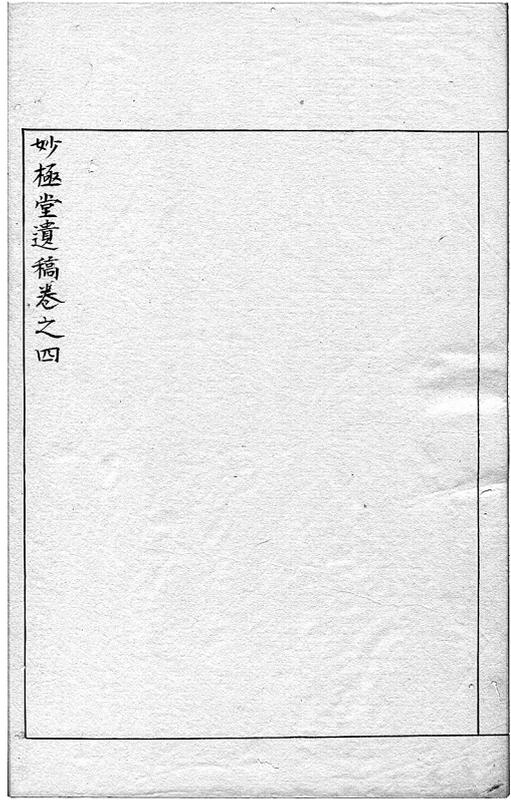
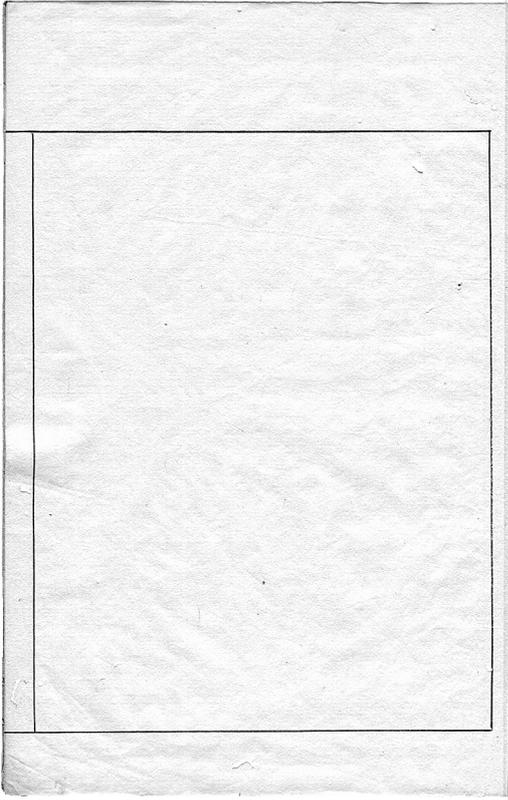
(白丁)

㊦
④
33
才



(白丁)

㊦
④
32
ウ



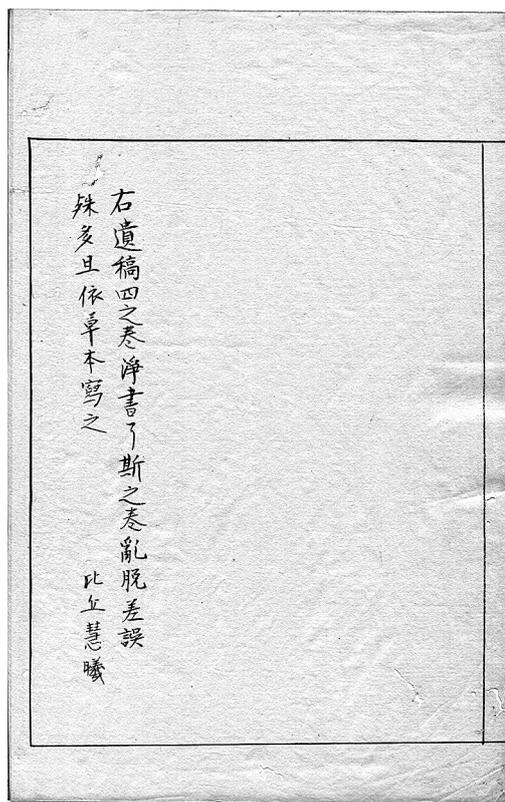
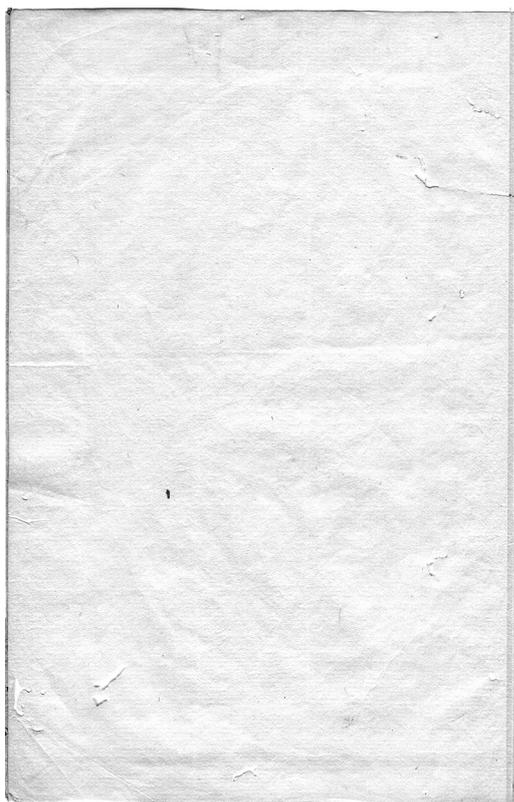
妙極堂遺稿卷之四

妙極堂遺稿卷之四

(白丁)

㊦
④
34
才

㊦
④
33
ウ



右遺稿四之卷淨書了斯之卷亂脫差誤
殊多且依草本寫之
比丘慧曦

右遺稿四之卷淨書了斯之卷亂脫差誤
殊多且依草本寫之
比丘慧曦

(白丁)

「④裏表紙見返

「④34ウ



「④裏表紙

(てらつ まりえ 生活機構研究科生活文化研究専攻修了生)
(せきぐち しずお 歴史文化学科)